

---

# みんなの夏休み

snow+

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みんなの夏休み

### 【Nコード】

N8084A

### 【作者名】

snow+

### 【あらすじ】

阿笠博士から旅行チケットをもらった少年探偵団たちは、蘭や園子や小五郎たちと夏休みに大阪へ向かう。大阪で平次たちと出会ったのだが、そこで事件と遭遇する。コナン、絶体絶命の危機?! 平次もピンチ?!

## 一枚のチケット

「ん？なんだよコレ？」

「私たち少年探偵団に……？」

コナンと哀は、阿笠からチケットを受け取った。そのチケットには  
”夏休み！大阪観光券”と書かれている。

「わー！」

「これは！大阪行きのチケットですね！！宿泊費や交通費も入ってるんですよねっ！」

「なんだよ博士？これくれんのか？俺はうな重の方がいいなあー」  
歩美と光彦もチケットを見て喜んでいる。元太がよだれをたらしながら言うのと、コホコホと、少し咳をしながら阿笠が答えた。

「福引で、夏休み三泊四日の大阪旅行チケットが当たったんじゃが……どうもわしは夏風邪を引いてしまっただけのお。それ一枚で10人まで効くみたいじゃから、せっかくの夏休みは大阪で楽しんで来たらどうじゃ？」

「って、俺たち子供たちだけで行くのかよ？」

「そう。いつもは阿笠が保護者代わりで行くのだが、ここ最近は夜が暑いために阿笠は腹を出し寝ていたようで、夏風邪を引いてしまったようだ。哀は無理もないという顔をしているが。」

「えー！博士が可哀想だよー」

「ま、私達だけではとても行けないけどね。」

「誰か保護者がいないと……」

歩美と光彦と元太は少し考え込むが、突然大声を上げた。

《あー！！》

「ねえコナン君。蘭お姉さんは？」

「はい……？」

「探偵のおじさんも、最近ヒマしてるみたいですよ！一緒に行ってくれそうじゃないですか！」

どうやら三人は、蘭と小五郎を保護者にするみたいだ。コナンは呆れながら声を上げた。

「あ、あのなあ！！お前ら！そんな急に無理だっつーの！」

「大阪だぜ？きつといいって言ってくれるぜ！」

すると三人は何やら内緒話を始め、突然立ち上がった。

「それじゃあ！」

「行きますかっ！」

《毛利探偵事務所へレッツゴー！！》

と言うと、三人はコナンの声も聞かずに、走って探偵事務所へ行ってしまった。

「おい！待てって…ったく、しょうがねえ奴らだな。」

「クス」

哀はそんなコナンを見、微笑する。

「おい、灰原、俺たちも行こーぜ…」

あきれながらも、コナンと哀も探偵事務所へ向かうことにした。

## 一枚のチケット（後書き）

下手ですはい……

登場人物は、全員一回は出そうと密かに思ってます。

事件なども起きた方がいいですか？

トリック考えられないけど……

## 少年探偵団と蘭と小五郎

《こっんにつちわー!》

三人は毛利探偵事務所に着き、おかまいなしにドアを開けた。三人の声を聞くと、事務所の奥から蘭が出て来た。

「こんにちは! いらっしゃい!」

蘭はエプロンを身に付けていた。どうやら、昼食の支度をしているみたいだ。

「あら、みんなそろって、どうしたの?」

三人に目線を合わせニコニコ笑いながら蘭が聞くと、歩美が答えた。

「ねえ蘭お姉さん! 夏休み、おヒマ?」

「んつと、そうねー? 特に計画はまだないわよ!」

と、蘭が言うと、引き続き光彦が聞いた。

「じゃあ大阪へ旅行に行きませんか??」

「大阪?」

三人が蘭を期待の目で見ると、ドアを開ける音とともにコナンと哀が入って来た。

「蘭ねえーちゃん、無理ならいいんだよっ!」

「なんだよコナン! いいーじゃねえーかよ!」

「あのなあ…」

コナンが呆れながら言うと、事務所の仕事椅子に座っている小五郎も会話に入ってきた。

「そうだそうだ! 蘭、よせよせ! コイツらに関わると疲れるだけなんだよ」

小五郎はイヤホンを耳に当て、新聞を見ながら言うと、歩美が小五郎に近付き、イヤホンを覗き込みながら聞いた。

「何聞いているの?」

「仕事だ仕事お! 邪魔だ邪魔だ! あっち行ってる!」

シッシツと手で歩美を誘導すると、光彦も傍に寄って来た。

「小五郎さん：競馬聞いてるんじゃないんですかー？」

と、光彦がラジオの本体からイヤホンの先を抜いた。するとラジオの音が大音量でもれた。

” おおー！！一番手ディープリンパ●ト早い早い！今期注目の滝選手！初白星を上げられるか…”

「こ：コラ！！お前らー！！」

小五郎は、こぶしを上げ探偵団をおどかした。しかし蘭が来て、

「おとーさん！何やってるのかなー？」

ーと、手をポキポキならし小五郎を睨んだ。小五郎の額には数滴汗が。

「こ：これには深～い事情が…」

「もう！！どうせ暇なんだから…」

「た：たまたまだよ！たまたま！！」

焦りながら小五郎が答えた。しかし蘭はそれに応じず小五郎の新聞を取り上げた。

「もう！どうせ依頼なんかここんとこ来てないんだから：大阪連れてってよね！」

「嫌だ、嫌だ！関西なんて行つてられるか！」

聞く耳をもたない小五郎に、元太がそつと言った。

「なーおっちゃん！大阪の海にはキレイな姉ちゃんがいるって父ちゃんが言ってたぞ！」

「（なんてこと聞いてんだよ…）」

コナンは呆れてるが、元太の一言で小五郎が顔色を変えた。

「よっしゃ！大阪にでもどこでも連れてってやるぞー！お姉さーん

！小五郎ちゃん今行くよーん♪」

## 少年探偵団と蘭と小五郎（後書き）

蘭と小五郎を誘う少年探偵団。

なんとか大阪行き決定です♪

10人までチケット効くから、ちゃんと登場人物を決めています☆  
誰か分かりますよね？



## 大阪へ行くまでに

「ハア…」

コナンがあきれながらため息をつくとき、コナンを横で見ていた哀が笑っている。

「クス…」

「じゃあ、今度の日曜日に行こっか！」

《賛っ成ー！！》

蘭の大阪行きの声を聞くと、三人は跳び上がった。

「元太くん！おじさんを説得させてくれてありがとうだね！」

「いや…それほどでもない！」

歩美に褒められ、少し照れている元太。すると、得意気に言ってみせる。

「しょ、少年探偵団・団長の任務をしたまでだぜ！」

それを見ていた光彦が、キツイ突っ込みを入れる。

「それにしても元太くん！あんなこと子供が聞いちゃダメですよ！」

「…嘘に決まってるんだろ！」

「なあ～んだあ～！」

”アハハハハハ”

三人の笑い声が飛び交う中、哀はコナンをからかっている。

「…ま、良かったんじゃない？海に行くならあの子の水着姿が見れるんだし…江戸川くんも嬉しいでしょ？」

「なっ?!」

コナンは頬を赤らめそっぽを向き答えた。

「バーロ、んなもん楽しみじゃねえーっての！」

「そうだっ！旅行っていつも園子にお世話になってるから、園子も誘ってもいいかな？」

蘭が探偵団に聞くと、歩美は大きく頷いてみせた。

「……」

「あら？どうかしたの？」

隣で何かを考え込んでいるコナンに、哀がそつと質問した。

「あ、いや。チケットって確か10人までだろ？探偵団と蘭とおっちゃん和園子だと、あと二人余るよな？」

コナンは指折り数え、答えた。

「そうね……。大阪のあの二人も誘ってみる？」

「そうだな。丁度になるよな。蘭に言ってみるよ！」

コナンはすぐさま哀に合意した。

## 大阪へ行くまでに（後書き）

哀の発言が少ないです（泣）

間に入れようと思いうまくいかなかったなので、最後にコナンと哀を入れてみました。

園子嬢も誘って♪

いざ大阪へ！！

## 蘭と園子

「ねえねえ蘭姉ちゃん！」

コナンは蘭に近寄り蘭のスカートの裾を引っ張った。すると蘭はコナンに気付き、少ししゃがみ話を聞いた。

「あら？どうしたの？」

「あのね、今決まったメンバーだと八人でしょ？チケットってあと二人使えるんだから、大阪行くんだし平次兄ちゃんと和葉姉ちゃんも誘わない？」

蘭はあっそうねえと答えながら、探偵事務所の電話に手をのばし、ダイヤルを回す。

「じゃあ電話するね！」

「うんっ！ありがとう！」

「あっ！もしもし和葉ちゃん？元気だったー？私もちろん元気よー♪あのね…」

「これでよしと。」

蘭が電話をかけ始めると、コナンは哀の元へと戻って来た。哀はコナンが戻って来ると、微笑しながら椅子に座った。

「…素晴らしい二重人格よね。見習いたいものだわ。」

「うっせーよ！ったく、オメーも大阪行けんだから、もっと喜べよなー？」

コナンの問いかけに腕組みし、目をつむり答える。

「あら…？それでもいつもよりかはテンション高い方だけど？」  
「……」

そして大阪へ行く日の朝。

今日は夕方に大阪へ着くように新幹線に乗る。大阪駅で平次たちと待ち合わせ服部家へ行き、今日は服部家に泊まらせてもらう予定だ。  
”ピンポン”

インターホンがなると、シーンとした事務所で聞き慣れた声が響いた。

「らぁーん！」

「あっ園子ー！早かったわね！一番よ！」

「はぁ…良かったわー！」

園子はハアハアと息を切らしていた。ここまで走って来たようだ。その荒い息に気付き、蘭が問いかけた。

「園子！もしかして、走って来たの？！」

ちよつと聞いてよと言いながら、園子が答える。

「そうなのよー！執事さんに送ってもらおうと思ってたんだけどね、車がパンクしちゃってさぁー！」

蘭から手渡されたタオルで汗を拭きながら、慌ただしく説明を続ける。

「20分もかかるって言われたから、走って来ちゃったー！」

「そりゃぁ大変だったわね！」

「ホントっ！！朝っぱらからねえ。」

コナンと蘭は園子の荷物を持つのを手伝い、部屋へ誘導する。

「重たかったでしょう？早く入って入って！」

「ありがとうー！今日もさ、誘ってくれてありがとね！関西には別荘がないから、あまり行ったことないのよね。だから、超楽しみにしてたりっ！」

話終わると、舌を少し出し笑ってみせた。

「そんなの、全然いいわよ！いつも園子には色んな所へ連れていってもらってるじゃない！大阪、楽しもうねっ！」

「おっしやー！遊びまくるわよん！いい男もゲットよー！！」

「園子には京極さんがいるじゃない！」

蘭と園子は、大阪旅行におおいに胸を膨らませているようす。

「（…鈴木財閥の令嬢だとは、全然思わねえよな…。ハハハ）」  
そんな二人をそばで見っていたコナンは一人そう思うのだった。

## 蘭と園子（後書き）

園子中心になりました！

っていうか、園子で書き始めたらこんなに長く止まらなくなっちゃいました（笑）

まだ朝の八時くらいの設定です。

次は少年探偵団が来ます☆

## 少年探偵団と小五郎

”ピンポーン”

園子が来てから一時間程経った頃だろうか。事務所のインターホンが鳴り、子供たちが大きな荷物を背負いながら事務所へ入って来た。

「おはようっ！」

「おはようございます！円谷光彦です！」

「…江戸川君いるかしら？」

そう。園子の次にやって来たのは、歩美・光彦・哀だ。

「おーオメエらやっと来たな」

歩美たちの声を聞くと、寝室からコナンが出て来た。その後ろには蘭と園子も続いている。

「みんなおはよう！」

「待ってたわよ！」

「園子さん、早いですね？」

てっきり自分たちが一番だと思っていた光彦は、園子を見少し驚いた。

「もっちゃん！…あれ？あんたたち、一人足りないわよね？」

園子は歩美たちを指で差し数えながら聞いた。

「元太くんは多分、お寝坊だよ」

「元太くんが一番楽しみにしていたのに、あの人はしょうがない人ですね。」

「…まっ、いつものことだけどね。」

元太のことをよく知っている三人は、すかさず答えた。

「ちよつと電話してやつか。出発まであと二時間もねえーぞ…」

コナンが受話器を取りかけた瞬間、事務所のドアが開いた。”バンッ”

「ハア…わりいわりい…」

息を切らした元太は、事務所に入りすぐさま座り込んだ。

「もう皆揃ったぜ？何してたんだよ？」

「本当わりいな！朝飯があまりにも旨くてよ、おかわりしてたら時間かかったよ！」

コナンの言葉を聞いた元太は、頭の後ろに手をやり笑いながら答えた。

そんなやりとりを見ていた蘭はそろそろ行こうとしたが、小五郎がいないことを皆に話す。

「さっ！みんな揃ったわね。あとはお父さんだけなんだけど…」

「えっ？！もしかしておじさん、まだ寝てるの？」  
びっくりした様子でコナンが聞いた。

「違うのよ…。綺麗なお姉さんとかなんとか言っちゃって、新しい服を買いに行ったのよ…」

「(ったく何してんだよ、おっちゃん…)」

「あれは嘘なのね。」

呆れているコナンに、歩美がそつと話しかけた。

「あらあら、噂をすれば…」

そう言うと、哀が向いた事務所のドアには、服装をバッチリ決めた小五郎が立っている。

「待たせたな、蘭…。さあ、諸君、…行こうか。」

「おとー…さん？」

「(アンタ誰だよ)」



## 少年探偵団と小五郎（後書き）

少年探偵団来ました〜！

まだ東京にいますね。

大阪行くまでが長〜い！

小五郎の格好は、原作などを見て想像してみてください（＾|＾）

## 米花駅へ

全員が揃うまでに、何時間かかっただろうか。一番待たされたのはコナンと蘭だが。しかし二人はそんなことはあまり気にしていない様子。

「さあ。行きましょう！」

全員が集まったので皆荷物を持ち玄関を出た。

「ねえ蘭、東京駅から大阪駅まで新幹線で行くんだよねえ？東京駅まではどうやって行くの？」

階段を降りながら、園子は蘭に素朴な質問をした。

「ああ。米花駅まで車で行って、米花駅から東都環状線で東京駅まで行くのよ。」

「米花駅の駐車場を予約してあるから、荷物が多くてもレンタカーで行くから大丈夫だよ！」

隣で聞いていたコナンは蘭に続き答えた。

「あら、そう♪」

「ゲ……」

コナンの言葉を聞いた小五郎は階段の途中で立ち止まり、顔が一気に青ざめていった。

「おじさん、どうしたの？」

「…レンタカー借りるの忘れた……」

《えー?!?!》

小五郎以外の皆も立ち止まり、全員の声が響きわたった。

「お父さん?! どうするの?!」

「この大荷物持って、米花駅まで歩きですか?!」

「そんなの俺はぜってー無理だぜ?! 腹減るしよお」

「おじさんしっかりしてよ」

歩美・光彦・元太の三人は、次々と小五郎をさす。

「(いつもコレだぜ……)」

「…どうなるのかしら？時間もないのに。」

呆れ顔のコナンを見て哀がコナンに話しかけた。

「…さあ？」

呆れてモノも言えないとは、こういうことなのだろうか…

”プルルル”

すると突然、園子の携帯電話が鳴った。園子は鞆の中の携帯を取り出し通話し始めた。

「もしもし？あつ姉貴ー？どうしたのよ？え？それがねー、困ってさあ…え！マジで！！ありがとう！じゃあ待ってるわ！」

通話を終わり携帯をしまう園子に、蘭が聞く。

「どうしたの？」

「あのね、今姉貴が結婚式場に着いてさ。あたしが乗ろうとした車を修理してから出掛けたいで、姉貴を送った帰りの車があいてるからうちの執事が米花駅まで送ってくれるってさ！」

園子はピースしながらみんなに電話の内容を伝えた。

「わー！良かったねー」

「一時はどうなるかと思いましたよ。」

「歩かなくて済んで良かったな！あーなんか安心したら腹減った！三人も大喜びの様子。」

「なんとかなったわね。」

「ああ、そうだな。しかしレンタカーを忘れるって…（おっちゃん、しっかりしてくれよなあ。ハハハ…）」

そうこうしているうちに、園子の執事が運転している車・リムジンが、毛利探偵事務所の前に着いた。

「わー！すごーい！」

「こんな近くで初めて見ました！」

「なあなあ光彦、これでうな重何杯食えんだ？」

「何千杯も食べられるに決まってるじゃないですか！」

三人は高級車を目の前に、興奮している。

しばらくするとドアがあき、中から鈴木史朗こと園子の父親が出て来た。

「どうもどうも毛利さん！」

「いやあ、今日はすみません。いきなりなもので…」

二人は会話しながら軽い握手を交した。

「とんでもない！娘がお世話になるということで、しかも毛利さんとご一緒だなんて！車でも飛行機でも飛ばしますよ！」

「あ、こりゃどうも。」

後頭部に手をあてて、おじぎをする。

「もうー難い難い！パパ早く乗ってよね！さっ！米花駅へ出発♪」

園子は史朗と小五郎の背中を押し、車へ乗り込ませる。残る皆も車に乗り、一行を乗せたリムジンは米花駅を目指した。

## 米花駅へ（後書き）

ああ（汗）

まだ東京にいる（汗）

早く大阪に着かなきゃ（笑）

あ、リムジン内での会話は、エピソードにでも書きますよ。

大阪行きがまだまだになっちゃうんでね（笑）

## 目暮警部と鉢合わせ

「パパありがとうね！気を付けて帰ってよ！」

米花駅に着き、園子が一番に車からおりた。

「ありがとうございました」

《ありがとうございました〜！！》

蘭や少年探偵団もおりてくる。

「いやいや：改札の近くまで、どうもすみません」

最後に小五郎がおり、史朗に礼を言う。

「とんでもない！今日は楽しんで来てくださいね！」

「本当ありがとうございます」

バンッ

最後にドアを閉めると、リムジンはバックし帰って行った。

「園子、本当助かったわ！ありがとう！」

改札口を前に、蘭や少年探偵団達が園子に礼を言っている。

「園子お姉さんありがとう！」

「助かりました！」

「今度うな重おごってやるからよ！」

「全っ然いいの！気にしないでっ♪」

手を振りながらも、少し自慢げに話す。

「：どうもありがとう」

哀も園子に礼を言った。

「え？いえいえ：」

微妙な空気が流れる。

「お〜！毛利君じゃないか！」

手を挙げながら、改札の裏から目暮警部がやってきた。

「あっ！警部殿！」

軽くおじきをする。

「なんだね？みんな揃って旅行かい？」

「はい！大阪へ行くんです。」

蘭が答えた。

「せいぜい楽しんで来てくれたまえ！君がこの町からいなくなると、事件も少なくなりそうだよ」

「（ハハハ：確かに）」

コナンが小五郎を見上げ呆れる。

「警部殿は仕事ですか？」

「うむ…。改札に爆弾を仕掛けたっていうのがFAXで警視庁に届いたんだが…」

「えー?!怖いよう…今爆発したらどうしよう…」

歩美が涙目になりながらしゃがみ込む。

「大丈夫だよ歩美君！」

目暮は歩美の頭を撫でた。

「ホレ！白鳥君が犯人を捕まえてくれたんだよ！」

目暮が指を指す方向には、パトカーと容疑者をパトカーに乗せる白鳥の姿があった。

「良かったわね…。立ちなさい…」

哀がそっと歩美に手を差し出した。

「哀ちゃん：ありがとうっ！」

歩美は涙を拭き、笑顔を取り戻した。

「では、わしは警視庁に戻るとするか。毛利君、じゃあな。」  
と言うと、目暮はパトカーに乗り込んだ。

ファンファンファン：

「じゃあ俺達も行くでしょう」

小五郎を先頭に、彼らは次来た電車に乗り込んだ。

## 目暮警部と鉢合わせ（後書き）

まだ東京にいる！（笑）

七話も東京だなんて…えらいこっちゃ（汗）

舞台は大阪のハズが…

…大阪舞台の話は、これの倍の倍は書いてやります！！（笑）



## 平次と和葉と合流

午後四時

予定通り毛利一行は、大阪駅に着いた。

「やっと着いたねー！」

「やっぱり関西は空気が違うわねー」

蘭と園子は背伸びをしている。三時間も新幹線に乗っていたのだから、無理もないが。

「おい蘭っ！あの色黒ボウズとはどこで待ち合わせてんだ？」

「えっと、ホームまで行くから、改札は出ないでって言ってたわよ。」

と小五郎と蘭が話していると、階段をおりながら和葉が手を振りながら走って来た。

「蘭ちゃん！！遅なってゴメンな！」

「和葉ちゃん！わざわざここまでありがとう！」

「そんなこと全然えーねん。でもホームでなんか、ちょっと待ったやろ？ゴメンなー！平次がホームとかゆーから…」

走って来たせいか、彼女の声は少し荒い。

「そういえば、平次兄ちゃんは？」

顔を見上げ、コナンが和葉に聞く。

「えっ？まだ来てへんの？！平次は大阪駅の近くにいてたから、先に来てたと思ったんやけど…」

和葉とコナンは辺りを見回す。すると、反対側のドアから平次が出て来た。どうやら、トイレに入っていたようだ。

「よう！」

手を挙げ平次が歩いて来る。

「よう！やないわっ！アンタ先行ってるーゆーてたのに！何やってんの？！」

「耳元でうるさいやっちゃなー！俺は三十分も前からここに来とっ

たんじゃ！トイレにも行ったらアカンのかい！」

「そんなんゆーてへんけど、毛利さんやら待たせたらアカンやろー！トイレなんか合流してからでええやんか！」

二人の喧嘩を前に、全員目が点だ。恐るべし…大阪人といったところか。

「……」

「（何やってんだ…）」

哀ですら少々戸惑っているが、コナンは呆れ顔で冷静だ。

「まあまあ二人共！早く行こうよ、ねっ！」

蘭が二人の喧嘩を止めさせようとするが、小五郎の次の一言ですらに険悪ムードに…

「そうだそうだ。こんな所でちわ喧嘩なんかやめてくれ。」

《っ?! 誰がちわ喧嘩や!!!!!!》

二人の怒りの声は、ホーム中に響きわたった。

「（ガキ…）」

## 平次と和葉と合流（後書き）

やっと大阪ですね！

でも、平次と和葉が中心です。

なんせ、大阪弁は楽ですからねっ！（笑）

つつい書いちゃいます！

でもバランスが取れてないわ…

少年探偵団ゴメンナサイ……

## 服部家

大阪駅から30分程で、服部家に着いた。今日は服部家に泊まるのだ。

「おかんー！帰ったで！」

バタバタバタバタ：

「なんやっ?！」

「毛利さん、ようこそいらっしやいましたー!!服部静華です。」  
彼女は服部静華。平次の母。姿からは考えられないほど、独特の大阪弁のなまりがついている。

「どうもこんばんわ!今日はお世話になります。…いや〜いつ見ても綺麗っすね…痛っ」

「お父さん…:!!」

蘭はすかさず小五郎の腕をつまんだ。

「まあ、お恥ずかしいですわ、毛利さんったら。ささみなさん、入ってください!」

茶の間に連れられた小五郎たちは、テーブルの上のごちそうを見てびっくりした。

「うひゃー!食べ物がいっぱいだぜ!！」

一番に食らいついたのは、やはり元太だ。いつもにもまして、目を輝かせよだれをたらしている。

それはそのハズ、十畳の部屋の端から端までテーブルがおいであり、ごちそうが十も二十もおいてある。元太じゃなくともこれには大満足だ。

「こりゃあ、すごいっすね!全部静華さんの手作りすか?」

「お口に合いますか:ねえ?毛利さんらが来るゆうて、作りすぎてしまいましたねん」

「ナンボなんでもやりすぎやわ:テツチリにお好みて:」

テーブルの上のテツチリとお好み焼きを見ながら、平次が言う。

「ええやないの、アンタ入れて十人も来るゆうからぎょーさん作っ  
たんや！」

「そやで平次、感謝しーや。」

襖が開いたと思ったら、服部平蔵こと平次の父親が入って来た。その  
後ろからは、和葉の父遠山警部も入って来た。

「おとん…?! いつの間アに」

「仕事かはよ終わったんや…。ほなみなさん、食べてください！毛  
利さんも、ホラ座らはって。」

「あ、どうも。」

その恐そうな顔からは想像もつかないように、来客には優しく振る  
舞っている。

《いただきますーす！！》

服部家の夕食は、賑やかに過ぎていった。

## 服部家（後書き）

コナン・哀・歩美・光彦・和葉・園子のセリフがない…

やばいです（泣）

でもココは服部家ということで、彼等に華をもたせてあげてください（爆）

次回は必ず…（苦笑）

## それぞれの部屋にて

《ごちそうさま!》

午後八時、全員が食べ終わった。静華の料理はみんな大満足のようにだ。

「平次お兄さんのお母さんって、お料理上手なんだね!」

「本当ですねー! すごく美味しかったです!」

「持って帰りたいぐらいだぜ」

少年探偵団の三人は、静華のことが大好きになったようだ。

「おおきに! そうゆーて食べてもらえると、めっちゃ嬉しいわあ! またいつでも食べにおいでや」

静華も嬉しそうに、探偵団たちと話している。

「:ごちそうさま。美味しかったわ」

「お前でもそう思ってたんだな」

「あら、何? 美味しかったもの。:大勢で食べれて良かったわ」

探偵団の横では、コナンと哀が話していた。

「それじゃあ、みなさん。寝室に案内しますわ。男性陣は平次の部屋で、女性陣は静華の隣の部屋をつこうてください。毛利さん! 良かったらあとで遠山と一杯しませんか?」

「おっ! いいっすな!」

平蔵はそれぞれ部屋を案内し、小五郎と遠山刑事と一緒に酒を飲み始めた。

## 女性陣の部屋

「服部君のお母さんの料理、美味しかったね!」

「ホント! あたしなんて、もう動けなくらい食べちゃった!!」  
布団を敷きながら、蘭と園子が話している。その会話に和葉も入って来た。

「ホンマやねー! 平次のおばちゃんの料理はアタシも大好きやねん

！」

「和葉ちゃんは、いつでも食べれるでしょう！服部君の彼女な・んだ・か・らっ！」

腕を和葉に当てながら、眉を動かし冷やかす。

「そ：園子ちゃん！そんなんちゃうよ！」

和葉の顔は、目が点で頬も真っ赤だ。蘭も可哀想だよといいながらも、彼女達の恋の話が始まる。

「：私達、お先にお風呂失礼するわ。」

灰原はこういう話が苦手なのか、歩美の手を引きお風呂へ行く。

## 平次の部屋

「へ〜結構片付いてるんだな。」

「探偵の部屋は資料とかがいっぱい散らばって汚いのかと思っていました。」

コナンと光彦は平次の部屋を見渡しながら思うことを言う。こう見えても、平次はキレイ好きなのか？

「うるさいなあ！工藤と一緒にせんとってくれるか？あんなホコリまみれの部屋：」

「おいっ！」

コナンが小声で平次の足を蹴る。

「：？！あそこは新一さんの家なんですか！！」  
驚き話を続ける。

「お化け屋敷だとばかり思っていました：」

「あの兄ちゃん、不吉だな。」

ポテトチップスを食べながら、元太も話に加わってきた。コナンはうっせえーなという顔をしている。

「姉ちゃんばっかに掃除任せてたらアカンのとちやうか〜」

チラッとコナンを横目で見冷やかす。と、急に話を思い出したように話し始める。

「せやせや！明日どこ観光するか決めとかなアカンな！」



それから男性陣達は観光マップを取り出し、観光地に赤ペンで丸をつけ始めた。

オマケ

「いやゝ毛利さんとうして乾杯出来るなんて、めっちゃ嬉しいですわ!」

「そんなゝゝ大阪の本部長さんにそんなこと言われるなんて、小五郎ちゃん嬉しすぎゝ!」

「ささ、もう一杯飲んでくださいよ!」

「じゃあお言葉に甘えてゝゝ♪」

こうして、朝まで酒を飲む小五郎達であった：

それぞれの部屋にて（後書き）

今回は女性陣が喋りすぎた?!

みんなちゃんとセリフがあるんでしょか：（苦笑）

最後のは、小五郎の酔いっぷりを載せました（笑）  
さうて！

次回はいいよ大阪観光♪

事件も起きちゃう?!

## 大阪！食い倒れの街

翌日

本日は、食い倒れの街で食べまくる予定である。

「今日は待ちに待った大阪観光だねー♪」

「やっと大阪に来たって感じになってきたわねっ！」

「食べまくれんだぜー！！ヤベエー！お腹減ったー」

服部家から、レンタカーを借り商店街へやって来た。まず最初に着いたのが、平次が常連のお好み焼きの店だ。引き戸で、古びた感じが丁度いい。

「らっしやい！！あ、平ちゃんやないかー！」

「店長来たで！今日は仲間がぎょうさんおんねん。お好み十人前頼むわ！」

さすが馴染みの店。平次は店長をはじめ、店員全員から名を知られているようだ。平次たちは五人づつで奥の席に座った。

「なかなかいい店だな。」

「落ち着くやろ？注文も来んの早いねん」

コナンと平次が話していると、どうやらその通り、お好み焼きが運ばれて来た。

「ありがとーさん！」

「スゲエな！さすが大阪だぜ。」

と言うと、お好み焼きを食べ始める。

「味もうまいやろ？めっちゃ安いし最高やわ！」

「美味しいね！！」

「…そうね。たまにはお好み焼きも悪くないわね。」

コナンの隣で歩美と哀も話していると、一人の男が店に入って来た。

「店長、ビールとお好み一つつつ。」

「はいっ！ビールとお好みワーン！」

その男は、カウンター席に座った。

「あれ？あいつ…」

平次がその男を眺めながら呟いた。

「服部、どうしたんだ？」

「いや…なんでもあらへん。」

と言うと平次は何事もなかったように、またお好み焼きを食べ始めた。コナンもじっと男を見ていたが、そんなに気にせずお好み焼きを口にやった。

## 大阪！食い倒れの街（後書き）

やって来ました！

食い倒れの街で食べまわるコナンたち！

…事件の予感です。

## 事件の前兆

「さ、そろそろ次の店行こか！」

平次達が席を立ったと同時に、また一人男がやって来た。痩せ型の眼鏡の男だ。

「らっしやい！！」

「コイツと同じやつ頼むわ」

その男は座っている男を親指で指差し、カウンターに座り男に話しかけた。

「遅なつてすまん、小柳。ちょっと支度に時間かかってな……」

二人は何か話し始める。コナンは少し気に止めながら、店を出た。

「次はたこ焼きのウマイ店に連れてつたるさかいになー！」

一行はレンタカーへ乗り込んだ。服部も店を振り向き、二人組の男を気にしているようだが……

「このたこ焼きおいしー！」

「こんな大きいタコ入ってるなんて初めてっ！」

「歩美も、こんなに大きなタコさん初めてー！」

「……本当、美味しいわね。」

「やっぱり本番のんは美味しいやろ？？」

女性陣は大阪のたこ焼きに大満足のようだ。

その隣では、何やら平次が考え込んでいる。

「何考えてんだよ？ たこ焼き冷めちゃうぜ？」

小一の口なので、大きいたこ焼きを一口で食べるのに精一杯ながらも、平次に話しかける。

「ああ……なんでもあらへん！ さ！ 食べよか！」

膝をポンっとたたくと、平次はたこ焼きを二、三個口にした。しかしコナンは何か隠していると感付き、話しかけた。

「おい。オメエ、さっき店にいた男のこと考えてんだろ」

服部はすぐさま反応し、手を止め口を開いた。

「せやねん。」

「知り合いなのか？」

「いや、ちゃう。」

平次は首を横に振りながら答えた。

「なら、なんなんだよ？」

「なんやどっかで見たことあんねんやんか！くそ！思い出されへん……」

手をおでこに当てもう一度深く考え込む。

「いいじゃねえーか、そんな急なことねえーんだろ？知り合いでもねえーし。その内思い出すって……」

そういうと、平次にたこ焼きを差し出した。平次もそうやなと言いながらパクパクと食べていく。

「あー！食った食った！やっぱり大阪のたこ焼きはうまいな！」

「さ、次の店行こか。」

車に乗る前にコナンが後ろを振り向くと、例の最初に店に入ってきた男がいた。その男は小太りで、のろのろと歩いていた。コナンに気付くと平次もその男を見る。

「やっぱり気にしすぎやったんやろか。」

「ああ……別に変な感じでもないしな……」

コナンが車に乗ろうとすると、男が路地へ曲がっていった。するとその途端、車のタイヤの鈍い音が響いた――

## 事件の前兆（後書き）

事件だ事件だ〜！

トリック作れなかったので、クライマックスはスリルを味わってもらおうと思います。

トリックはないので超単純なんでね（爆）



## 事件

《まさか！》

コナンと平次は一斉に男の元へと駆け出した。

「コナン君?!」

「ちょっと平次どこ行くん?!」

蘭と和葉の声なんて、耳に入らなかった。

「どいてみ！」

男の周りには、数人の人だかりが出来ていた。

平次はしゃがみ込み、頭から血を流し倒れている男の脈を計ると、首を横に振ってみせた。

「：つくそ！」

コナンはその小さい拳を地面に打ち付けた。よりによって、俺が見ている前で：！平次も同じ気持ちだった。

「なあなあ平次、どしたん？」

「お前等は来んなア!!」

平次の声を聞く前に、和葉達は男を見その場にしゃがみ込んでしまった。

「どうしたんですか？」

「うまいもんでもあったか？」

「お前等は来るな!!」

しかし光彦達もコナンの声を聞く前に、男を見何も言えない状態になっていた。

《キャー!!》

「おっちゃん！救急車と警察に電話や!!」

「おじさん早く!!」

「わ：分かった！」

小五郎はすぐさま携帯を取り出すと、救急車と警察を呼んだ。

そして十分後。救急車とパトカーが到着。男は近くの病院に運ばれて行った。

「多分助からねえーと思うけどな…」

「そうやな…」

パトカーから、大滝刑事がおりてきた。平次を見付けると駆け寄ってきた。

「平ちゃん。平ちゃんが知らせてくれたんやてなあ。」

「そうや…」

「ボウズ、目の前で怖かったやろ。」

大滝はコナンに近寄ると、頭を撫でた。

「ボクは、大丈夫だよ…」

すると大滝はもう怖ないでと言い、小五郎の方を向いた。

「ご無沙汰です、毛利さん。しかし毛利さんも、よー事件に巻き込まれる人ですなえ。」

「ハ、ハア。」

「聞きたい事もありますし、大阪府警まで来てもーてもええですか？」

小五郎達は大滝に連れられ、大阪府警へ向かった。

## 事件（後書き）

事件？

事故に見えますが（汗）

しかも事件の詳細が詳しく書けてないので、どんな状況か分かりませんね（泣）

説明下手ですみません（＜―＞）

事件はやっぱり難しい…

次回は詳しいはず…

## 事件の内容

大阪府警内

コナン達は、事情聴取…というまでにはいかないが、大滝と話しをするため府警へ行った。

大滝は手帳を取り出し、被害者について話し始める。

「被害者は小柳哲郎さん（38）や。枚方市に住んではる。仕事は建築家で、今日は小柳さんが自分から休み取らはったみたいやわ。」

「ごく普通の人なんやな。可哀想に…」

「加害者は橋元勤さん（26）や。在住は東大阪市。デパートの正社員してはる。今日は仕事がはよ終わって友達と飲みに行くことになって、急いで車走らせてたみたいやわ。」

腕を組み、椅子に座り聞いている平次。その横にはコナン・小五郎・蘭・和葉・園子が座っている。哀は少年探偵団たちを落ち着かせ、隣の部屋でジュースを飲んでいる。

「で？現場の常態はどうだったんすか？」

大滝は、現場の写真を見せながら話し始める。

「周りの人々の話しやと、被害者はよそ見しながら角曲がったらしいんですわ。車にひかれんのも無理ないみたいすなあ。そうやろ？平ちゃん。」

「そうや…。俺とこのボウズが被害者を目で追っとったら、タイヤの鈍い音が聞こえて駆け寄ったんや。」

加害者は今どないしてんのや？」

「三階の部屋で事情聴取してるで。なんでも自分も携帯使ってて注意がなかったゆうてるみたいやわ。」

「罪は…どうなるんすか？」

「今ところは、懲役一年と、罰金になるんやろなあ。」

そんなところかとみんなが首を傾げた時、コナンが大滝に聞いた。

「被害者と加害者の関係はないの？」

「コイツいつの間に…！」

小五郎が追い出そうとするが、大滝が話し始めたため、追い出せなかった。

「まったく見つからへんなあ…。二人とも大阪に住んでるけど、在住市も年齢も職業もバラバラ。共通点なんか一つもあらへん。」

「じゃあ事故で決まりっすな」

小五郎が言ったと同時に、大滝の部下が部屋に入ってきた。

「大滝さん、被害者の治療結果出ました。」

「どやったんや？」

みんな一斉に部下を見るが、部下は下を向き、残念そうに首を横に振った。

「…頭と体を打ち付けていて、後頭部強打の即死みたいです。」

「そうか…。」

みんなが残念に思う中、平次が口を開いた。

「俺がすぐに駆け寄った時は、もう脈はなかったで。なあ、ボウズ？」

平次はコナンを見下ろし聞く。

「うん。だからあの時もうすでに…」

沈黙の中、またもや大滝の部下が入って来た。部下の後ろには、二人の男が立っている。

## 事件の内容（後書き）

詳しく書いたつもりですが；  
大丈夫ですかね？？  
ただ事故なんでしょうか？  
それとも……

## 二人の関係者

「大滝刑事、昼間害者と一緒に行動していた男と、今日の夜害者と待ち合わせをしていた男を連れて来ました。」

大滝の部下はそう言うと、男を二人、部屋に入れた。

その男の一人は、お好み焼き店で見た、痩せ型の眼鏡の男だ。

「工藤、コイツ昼間見たやつかな。」

「ああ。取り敢えず話し聞こうぜ」

平次はコナンと小声で話している。その横では、椅子を持って来た大滝が男に話しかけた。

「どうもすみませんねえ。ここ座ってもらえますか。」

男二人は椅子に座ると、大滝はまず、痩せ型の眼鏡の男に話を聞いた。その男は淡々と応じている。

「俺は、カトウツルキ加藤鶴樹、37歳や。大阪の寝屋川市に住んどる。」

「小柳さんとはどんな関係で？」

「俺と小柳は、元仕事仲間やったんや。」

「アンタ、建築やめたんか？」

側で聞いていた平次が尋ねた。

「俺は結婚したらおとんの仕事継がなアカンかって、三年前に結婚したから建築やめたんや。」

「小柳さんとはそれから連絡を？」

「職場仲間とは、俺が仕事やめても結構連絡取ってたんやけど、小柳とは一番気イ合ってたからな。今でも連絡取り合おて、今日みたいにたまに会おてるんや。」

コナンは加藤をじっと見ている。

次にその隣の背の低い男が大滝に言われ、面倒くさそうに話し始めた。

「俺は神崎一カンザキハジメ38歳や。小柳とは、幼馴染みやねん。」

「今日はどっちから約束したん？」

平次はさっきから腕を組みじっと聞いている。

「向こうからや。話したいことあるゆゑ、朝電話かかってきたんや。」

「内容は？」

「知らんわ。」

「そないですか。いやあ、時間とつてしもてすんませんなあ。また後日改めて連絡しますさかいに……」

大滝が加藤と神崎を部屋から出そうとすると、平次はコナンに耳打ちした。

「どう思う？」

「さあな……まだなんとも。色々調べた方が良さそうだな。事故なのか事件なのか……」

「せやな……」

と言うと、平次は加藤と神崎を引き止めた。

「最後にあんたらに聞いてええかいな？」

「なんや？」

加藤は慌ただしく早く帰ったそうに答えたが、平次は気にせず続けた。

「あんたら二人、知り合いか？」

「ちやう。さっき刑事に連れられ、初めて見たわ。」

「そうや。」

「ふーん……ほなええわ！」

と平次が言うと、加藤と神崎はさっさと出て行った。

平次とコナンも立ち上がり、ドアへ向かう。

「俺達も行動開始や！」

「まずは現場からだな！」



## 二人の関係者（後書き）

さあ？

どうなるのでしょうか？

てか…！

私大事なことに気付きました！

……タイトルと小説内容が合っていない？！

アハハハハハ…

しかも小五郎の海行きはどうなった？！（笑）

胸騒ぎが…

部屋を出ようとした平次を見つけ、和葉が話し掛けた。

「なあ平次？どこ行くん？」

「ちょっと現場行って来んのや！」

「ボクたち、お話しもう終わったからね！」

コナンも返事するが、和葉はそんな平次に対抗して言う。

「何ゆうてんの！！アタシら、観光中やんか！まだまだ商店街行くんやろ？」

「和葉らで行って来たらええやろ？」

和葉は平次がいないと楽しくないと寂しくなったが、いつもの口調で喧嘩腰に話してしまった。

「そんなん平次の勝手やん！！せつかく蘭ちゃんが誘ってくれたのに！！！」

「私は大丈夫だよ、和葉ちゃん！まだ明日も明後日もあるんだしさ！ね？」

「そやかて…」  
残念そうな和葉に向かって、平次はいつもにもまして真剣な顔で言う。

「和葉…分かってくれ。俺の目の前で事件が起きたんや。しかも止められへんかった…。やから、ちゃんと納得いくまで調べたいねん」  
「…事故とちゃうのん？」

「な～んや、引っ掛かんねん。やから、俺は調べに行きたいんや！」  
「服部くん…新一みたい……」

蘭も、真剣な眼差しの平次を見入ってしまった。和葉も分かったと降参したようだ。

「そこまでゆーんやったら…。でも、無茶せんときや！！」  
「おうっ！」

平次は帽子のつばをくるっと後ろへやった。

「(平次……)」

「ちゅーことで！おっちゃん！後はよろしゅうな！」

いつもの口調に戻った平次はコナンの頭に手をのせ、

「このボウズは借りていくけどなっ！」

といい、二人は部屋を飛び出した。平次の後ろ姿を見送った園子は、からかい口調で和葉に話し掛けた。

「和葉ちゃんっ！！今のドキッとしたでしょう？」

「そ、そんなんちゃうよっ！」

和葉は頬を赤らめ、動揺を隠しきれないようす。

「ふふふ、和葉ちゃんたら可愛い！」

「ら、蘭ちゃんまでやめてよー！！！」

”ドクン！”

「え？！」

「どうしたの、哀ちゃん？」

コナンが出て行くと、哀は隣の部屋で妙な胸騒ぎがしていた。歩美が横で心配そうに哀の顔を覗き込んでいる。

「え？ああ…なんでもないわよ。」

微笑しながら、歩美に言う。

「それより、吉田さんたちはもう大丈夫？」

「そう。歩美・光彦・元太の三人は、小柳が頭から血を流し倒れているのを見てから、ショックで混乱していたために、コナンたちがいる隣の部屋でジュースを出され冷静になっていたのだ。」

「もう大丈夫だよ！ね？光彦くん、元太くん」

「はい。凄くびっくりしましたけど、今は落ち着きました。」

「俺、腹空かなかったぜ……」

なんせ三人はまだ小学一年生。少年探偵団として事件に何度か遭遇しているが、今回のショックは強かったみたいだ。

「そう…良かったわ……」

「哀ちゃんこそ大丈夫？」

「えっ？」

「お顔…怖いよ??」

歩美たちに不安をさせないように、笑ってみせる。

「本当に、大丈夫よ。」

「そう?良かったぁー!」

哀は事故のことなんかではなく、さっきの胸騒ぎが気になっていた。  
「……」

**胸騒ぎが…（後書き）**

平次と和葉の言い合いつて、やっぱりいいですねえ☆  
つつい沢山書いてしまいますね♪  
ほのぼのします。

今回は、キャラ結構喋ってるでしょ？  
バランス考えました！

さて、哀の胸騒ぎは…?!

## 探偵団のお邪魔？

コナンと平次は、事故があった場所へ辿り着いた。しかし初めは関係のない話しをしていた。

「オメエ…」

「ん？何や？」

コナンに話し掛けられたのに、コナンではなく現場を見ながら答える。コナンも現場を見ながら話しているのだが。

「オメエ、今のちよつと格好つけすぎじゃねえーのか？」

「そ…、そないなことあらへんがな！ハハ…」

少し恥ずかしそうに、答える。

「なにが〔俺は調べたいんや〕だよ…」

平次のマネをしながら問いつめるコナン。そんなコナンに目線を合わせながら

「うっさいねん！」

と言うと同時にコナンの両頬をひっぱってみせる。

「いてっ！やめろよ！悪かった悪かった！」

手は離れたが、平次の反撃はまだ続く。

「工藤こそ、姉ちゃんに〔新一みたい〕てゆわれた俺に妬いてんのとちゃうんか？」

ニヤつきながらコナンをからかう。バ―ロと言いながらも、コナンは頬を赤らめていた。

「ま、そんなことより捜査や捜査！工藤もコイツはおかしい思てるんやろ？」

「ああ…。服部の言う通り、何か引っ掛かんだよなあ…」

と言うと、コナンの探偵バッチが鳴った。

ピピピピ…

コナンはバッチのアンテナを立て、会話を始めた。

「あん？何だよ、オメエーら。」

『何だよじゃないよ！もう！』

『蘭さんから聞きましたよ！！また抜け駆けしてますねっ！』

『コナン！卑怯だぞ！』

歩美・光彦・元太の声は、大音量で聞こえてくる。コナンはバッチを少し離し、話す。

「バーロ、なんじゃねえーよ。」

『本当にいー？？』

歩美の悔しがる声が響いた。

「本当だって！それより、オメエら怖がってたじゃねえーか？大丈夫なのかよ？」

『今は大丈夫です！落ち着きました！だからこうして連絡を…』

コナンは話しが長くなると思い、嘘を言い切ることにした。

「あつヤベツ！電池が切れそうだ！」

『えー！ねえ哀ちゃんもコナンくんに何か言ってよ！』

歩美たちでは、バッチが一つしかないため、一つのバッチで話しているようだ。

『江戸川くん…』

「ああ？なんだ、灰原？」

すると灰原は、さっきの胸騒ぎがした。灰原は胸騒ぎはコナンのことだと思い何か言おうとするが、やはり言えなかった。

『あ…江戸川くん……』

「何だよ？」

『……なんでもないわ…。』

「あん？じゃあ切るぞー？」

哀をよそに、向こうはバッチの取り合いになっているようだ。

『ちよつと貸せよっ！コナンー！お土産頼むぜ！！』

「へいへい…じゃあ切るぞ！」

と、コナンはバッチの電源を切った。

「なんやったんや？」

「さあな。また抜け駆けだと思ってんだろーよ。」

実は、連絡をしようと言い出したのは哀だった。抜け駆けしてるかもと言うと、歩美たちは疑問なくいいよと言うと思い、哀のバツチで連絡したのだった。

でも哀は、コナンに言えなくて…少し後悔していた。哀の予感はこの後の中するのだから……



## 探偵団のお邪魔？（後書き）

探偵団は最初に比べ、話すことが少なくなってきたので、哀の意味  
ありげな会話を入れようとここで探偵団を登場させてみました！  
コナン！平次！  
早く調査頑張りや！（笑）

## コナンと平次の聞き込み

「まあ大滝はんがゆうてくれたんで間違いないとは思うけど、一応聞き込みしよか？」

「……。」

「どしたんや？ 工藤？」

「あつ、おうそうだな…、じゃあ服部は向こうを頼む…。」

二人は二手に分かれ、聞き込みを開始した。しかしコナンは、さつき哀が何かを言いたそうにしていることをすぐに感付き考えていた。

「（あいつ…声のトーンがいつもより下がってやがった…。何か言いたいことでもあんのか？）」

コナンはもう一度バッチで連絡を取ろうとしたが、コナンの探偵バツチは本当に電池が切れてしまっていた。

「（くそっ…まあ帰って聞けば済む話だよな。今は聞き込みに集中だ。）」

そう自分に言いきかせ、コナンも聞き込みを始めた。

十五分後

「どやった？」

「ああ、大滝刑事が言っていたのと同じだったよ。そっちは？」

「俺も新しい収穫はないわ。」

二人は現場で合流した。何人かに話を聞いて回ったが、二人共大滝から聞いたのと同じだったようだ。

「アカンなあ。もっと情報があるわ…。」

「なあ？ 服部？」

「なんや？」

平次がコナンを見ると、手を口に当て何やら考えている。

「オメエ、害者を見たことあるつつつてたよな？」

「ああそうやで？」

「思い出せねえーのか？」

「今そんなことええやないか？」

平次にはコナンの考えていることが、分からなかったようだ。数分の間沈黙が続いたが、コナンが口を開いた。

「俺も思ったんだけどよ…小柳と加藤をどっかで見たことあんだよな…」

「なんやて?!」

「ちょっと来てくれ…。」

そういうと、コナンと平次は大阪府立図書館へ向かった。

## コナンと平次の聞き込み（後書き）

コナンと平次は事故死には思えず何かが引っ掛かっているのですね  
〴〵

次回から、コナンと平次の推理が始まります〴〵！  
なぜ図書館へ？！

ふふふ…あることを調べに行くのですよ（笑）

## 見えてきた事件の全貌

「工藤、図書館なんか来て、何すんのや？」

二人は図書館に入った。コナンは平次の言葉を聞く前に、スタスタと一人歩いて行く。

「ちょー待てや！」

平次もおいていかれないようはや歩きでコナンを追う。するとコナンは、パソコンの前で止まった。

「何か調べんのか？」

「ああ……」

さっきから無口だったコナンは、やっと口を開いた。そして”浪花の海賊”と入力し、検索した。

「浪花の海賊て？！あの連続宝石強盗団か……！」

「ああ。コイツに関してのホームページを探してんだ。ニュースで流れてるぐらいで、大阪のことだから俺はさっぱりだからな。」

「そう。”浪花の海賊”とはその名の通り、大阪を中心に関西で起きている連続宝石強盗の容疑者だ。この名は、強盗団が直々に主張してるものだ。」

「そやかて、なんの関係が……そういうことか。」

ホームページの映像が流れた瞬間、平次の口元がゆるんだ。

「やっと気付いたか。服部にしては、遅かったみてえだな？」

「フン、悪いか？」

コナンに嫌味を言われているのに、平次はニヤけながら答えた。

パソコンの画面に映っているのは、強盗団・浪花の海賊が盗みをしているとある宝石店の映像。

メンバーは三人。めがしらを被りジャンパーを着ていて顔は全然分らないが、三人の体型は今日会ったあの三人にそっくりだ。

小太りの小柳・背が高く痩せ型の加藤・そして背が低い神崎……

あの三人は、強盗団だったのだ。

「これで小柳の事故の線が少なくなっただろ？」  
「そうやな…。あとは小柳と加害者との関係を調べるだけや。」

## 見えてきた事件の全貌（後書き）

なんとなく見えてきたんですね。

てか、浪花の海賊なんて：

ベタすぎですいませんね（笑）

## 服部家の平和

二人は強盗団のページを数枚コピーし、図書館から出て来た。

「服部が見覚えがあると思ったのは、男達が並んだ体型からだったんだな。」

「そうやわ。でもなんで顔知らんのに、小柳の顔に見覚えあったんやろか？」

「それはただ単にどっかで見たんじゃないのか？」

二人はやっと引っ掛かっていた謎が解け、服部家へ帰って来た。もう日も落ち、夜の七時頃になっていた。

「平次！遅いわ！！」

玄関へ入ると、手を腰にあて、エプロン姿の和葉が。奥から蘭も出てきた。蘭もエプロン姿だ。

「やっと帰ってきた〜！コナンくんっ！ダメよ、こんな時間まで！服部くんが一緒だから安心してたけど…」

「ごめんなさい…」

コナンは、悲しげな顔で言ってみた。すると平次は和葉を指差し、二人でこんな会話をしている。

「エプロン姿で何してんねん?!」

「今日はアタシと蘭ちゃんと園子ちゃんて料理作ってんの！」

「また合わへんことを…。調味料間違わんときや！えらい味になるぞ！」

「そんななんゆーんやったら、平次は食べるとき！」

すると奥から園子が慌てて出てきた。

「ちよつと和葉ちゃん！彼氏と和気あいあいと話してないで、手伝ってよね！蘭も早く来て！お鍋沸騰してるわよ！」

「あっ園子ごっめ〜ん！」

「そ、園子ちゃん？彼氏なんかとちゃうんよ！アタシは平次のお姉さん役として…」



蘭と和葉は、慌てて台所へ戻って行った。

「和葉のやつ：なにしてんのや：」

「ちょっと嬉しそーじゃねえーかよ？」

コナンが平次の足を腕でつく。余計なことゆうなと言いながら、二人は茶の間へ急いだ。

## 服部家の平和（後書き）

サブタイトルの平和とは、この会は平次と和葉が中心であり、事件の内容が分かってきたのに今はまだ平和（あとから大変になってくるんで）という二つの意味をかけました。

もうすぐ犯人たちと対決するのにこんな会話を書いてていいのでしようか…（苦笑）

## 二人の推理と哀の心配（前書き）

ここではコナンと平次が推理をするのですが、作者は罪とかよく知らないなので、想像で書きました。

指摘などはやめてくださいね（＜―＞）汗

あと、現実とは全然違うと思うので、この小説だけの罪だと思ってください（汗）

## 二人の推理と哀の心配

コナンと平次は晩御飯を食べ終わり、平次の部屋にいた。元太と光彦はお風呂に入っていていないので、今がチャンスだと思い強盗団の話しを始めた。

「被害者の小柳と、加害者の橋元がもし知り合いやとするとや！」

「仲間割れして小柳が他のメンバーと違う意見を言い、仲間に殺られたんだと思うけど…」

「共通点があらへんかったんやろ？」

「まあ、加藤と神崎もお互い知らないって言ってたし、いくらでも他人のフリは出来るって訳か…」

二人は思うことを順番に言い合うが、二人の推理は、見事に合っている。

「ほんで、小柳と橋元は繋がりがないようにみせかけ…」

「橋元自ら小柳を車でひいて、懲役は短くすぐ出られるから刑務所から出たことは終わり…」

「ただの他人に対しての事故やったら、面会も刑務所範囲内での行動も自由やしな。」

「だろうな…。トリックだと自分達が強盗団と知られる危険性があるから、強盗団ではない橋元がやったんだろうが…。(橋元も強盗団のメンバーか?)」

「俺らには簡単に解かれてしもたみたいやけどな。」

二人は、大体のことは見抜けたようだ。あとは、どうやって逮捕するかを考える。

「大滝はんやったら、俺のゆうーこと信じてもらえと思うけど…証拠があらへん！証拠なかったら逮捕出来ひんやんけ…」

「…こっちから乗り込むか？」

「…そうしか方法はあらへんみたいやな…」

一通り決まったところで、明日加藤らを追うことを考える。計画を

紙に書き、今日は早く寝ることにするようだ。

布団を敷こうとした時、ドアのノック音が聞こえた。

”コンコン”

「誰や？入れや！」

平次が答えると、哀がゆっくり部屋に入ってきた。

「灰原！どうしたんだ？」

「：やっぱりこれは事件だったようね。」

「盗み聞きしてたんか、姉ちゃん？！」

「あら：、ごめんなさい。そんなつもりはなかったのよ：。」

コナンと平次がお互いの推理を言い合う前に、灰原は平次の部屋の前に来ていた。だが二人が推理を次々と披露していくので途中からは入りにくく、結局最後まで聞いてしまったというのだ。

「ま、灰原で良かったけどな。」

「あら？事件だってこと、皆に知られたくないの？」

「そうじゃねえーけど、小学生がこんなに推理してたらおかしいだろう？」

「あ：そっちね：。」

哀は、少し呆れたように言った。しかしコナンは続けて、哀に喋り掛けた。

「んで？ここに来た用はなんなんだよ？」

哀はうつ向き答える。

「あ：あの：：：」

「なんだよ！ハッキリ言えよなっ！さっき話した時も、何か言いたそうだったろ？」

哀は正面を向き、コナンをじっと見つめた。コナンは次第に焦り始めた。

「な：なんだよ！？」

「あなた：：：。明日犯人の所へ行くつもりなんでしょ？」

「ああ。：で？」

カッとコナンを睨み答える。

「…気を付けなさい！」

「は？」

コナンは、何が何だか分からずにいた。

「明日あなたの身に…何かが起こるかもしれないわ……」

真剣な哀に対し、コナンは哀の肩に手を置き自信満々に答えた。

「何言ってるんだよ？俺はいつも大丈夫だろーがよ？心配すんなっ！」

コナンは歯を見せ、ニカッと笑った。その言葉と表情に、哀はフツと笑ってみせた。

「そうね…、心配すぎよね。江戸川くんだものね…。」

コナンも、いつもの哀に戻ったのを見安心した。

「しかしよー、何だよ？急に？」

「……女の勘ってやつかしら？」

哀は微笑を浮かべる。

「歩美みたいなこと、言ってるなよなっ！」

平次は遠くから見ていたが、哀が苦手なようで、あの平次が一言も会話に入って来なかった。

「…それじゃあ気を付けてね。おやすみなさい。」

哀が部屋から出て行くと、平次は緊張がほぐれたかのように肩の力を落とした。

「あの姉ちゃん…苦手やわ。」

「ハハハ…さ、寝ようぜ。」

二人は明日のため、今日は九時半に床についた。

## 二人の推理と哀の心配（後書き）

推理がややこしくなっていましたか…（汗）  
意味分かりますかね？

こんな推理でごめんなさい（＜―＞）  
トリックとかないでしょ？

作れなかったので（笑）

哀は心配性だ；

書いてて、哀がコナンを思う気持ちが分からないこともないけど…  
クライマックスが近付いてきたあゝ

## 尾行

次の日の朝

朝食を先に済ませたコナンと平次は、加藤たちを追おうと家を出る準備をしている。

「絶対捕まえてやんぞ！工藤、あのじいちゃんの発明品全部持って行くんやで？」

「わあーってるよ！」

すると急に平次の部屋のドアが開いた。

ガラッ

「平次っ！」

「うわっ！！ビビるやんけ！ノックぐらいしろ！」

「ええやんか別に！」

「…何の用や？」

大阪の地図を見せ、さっきとは違いニコツと笑ってみせる和葉。

「今日はドコ行こー？USJとかええんちゃう？大阪城とかも行きたくないあー！」

「…和葉堪忍っ！」

和葉の笑顔を見、申し訳なさそうに手を合わせ謝る。

「今日はちょっと出掛ける用事が…」

和葉の顔から笑顔が消えた。

「…今日も事件なん？」

「せや。昨日の調べたら事件やったんや！今から行きたいねんけど…」

しかし和葉はまた笑顔を取り戻し、平次に笑いかけた。

「事件やったらしゃあないわっ！ええよ！行つてきィや！」

「和葉……。」

平次は、和葉が無理に笑っていることがすぐにわかった。

「その代わりっ！明日はちゃんと連れてってや？USJも大阪城も



通天閣もやでっ？」

「：当たり前やろ！どこへでも連れてったるわ！  
ほな行ってくるわな！」

平次はそう言うのと、部屋を出階段をおりて行った。その後ろにコナンも走って階段をおりる。

「：氣イ付けるんやで。平次。」

「ふー！なんとか和葉から逃げ切れたもんな。」

手でおでこを拭きながら昨日の路地を歩いている。

「彼女、可愛そうじゃねえーか？」

そんな平次を見、コナンが話す。

「：明日約束したからええやろ。今日は浪花の海賊捕まえるんや！  
何が浪花やねん！強盗のくせに浪花なんか使われてて、めっちゃ腹  
立つねや！」

ーと、さっそく加藤の姿を見つけた。昨日と同じお好み屋へ入って  
行く。

「あ…！加藤だぜ！どうする服部？」

「尾行しよか。一応大滝はんに俺らの推理話して、向こうが少しで  
もボロ出したらすぐ捕まえてくれるよーゆうとくわな…」

「頼むぜ。」

コナンの返事を聞くと、平次は携帯を取り出し大滝にかけ始めた。  
コナンと平次はお好み屋の前の路地で張っている。

「電話したわ！浪花の海賊のこと、色々調べといってくれるみたい  
や。」

「さんきゅーな。」

平次が携帯をしまおうとした時、お好み屋から神崎が出て来た。

「アイツ…?! 神崎もいてたんかいな…。」

「そうみてえーだな。：多分一人で出て来たってことは、店ん中で  
も他人のフリしてたんだろうけど…」

「唯一二人が連絡の取れるところは…！」

《トイレ!》

それから数分後、加藤も店から出て来た。コナンと平次は加藤の姿が見えなくなったら、すぐさま店へ入った。

「あっ平ちゃん! いらっしゃい!」

「店長、ちょー聞きたいことがあるのやけど…」

コナンと平次は、店長から話を聞き店から出て来た。

「やっぱりな…」

「店長が見とった。二人共、トイレに入っただけやな。」

「しかも神崎が出た後すぐに、加藤が入ったみてーだし…」

「神崎がトイレに伝えたいこと書いた紙置いというて、加藤が見たんやな…」

そう。加藤と神崎は、店のトイレの中で連絡を取り合ったのだった。コナンと平次は、新しい考えをもった。

「多分、今日強盗を犯すな。」

「そうやろな、最後の強盗した日から一週間は経つとるさかい、奴らはそろそろ行動するわ…」

「メンバーは二人になったから、多分小さな宝石店を狙うんだろーけど…」

「仲間が他におらんかったら…やで?」

「そうだな…」

そこで平次は、大滝に電話で大阪の小さな宝石店に、分かりにくいよう見張りをつけるよう頼んだ。

そこの作戦は強盗団を捕まえることではなく、あっさり盗ませて奴らを追い、縄張りを捕獲することにした。

## 尾行（後書き）

そろそろラストへ近付いてまいりました…!!  
クライマックスはどうなるのでしょうか？  
ハラハラさせられるよう、頑張ります!!

ありえない出来事が…

「大滝はんから連絡来たわ。何人か分からんように人に混じって宝石店見張ってるて。」

「よし。あとはどこに現れるかだが…」

「まだ朝やで、大丈夫や。あいつらの逃走手段はいつも車みたいやから、家帰ってバイク取りに行こや？」

「ああ。」

二人はお好み屋の前でずっと作戦を練っていたが、バイクを取りに行く為一度服部家へ戻ることにした。

服部家の前まで来ると、蘭・和葉・園子・少年探偵団がドアから出て来た。

「あ…、お前らどこ行くんのだ？」

コナンが歩美たちに駆け寄り聞くと、歩美は頬を膨らませてみせた。

「どこ行くんのだ？ じゃないよー！」

「平次さんと朝早くから出て行って、また抜け駆けですかっ?!」

「昨日結局、うまいモンくれなかったじゃねえーかよ！」

三人がうるさく近付いて来た。哀は何も言っでは来ないが。

「だーちよっと町を探検してただけだよ！」

「本当？」

「ああお前らこそどこ行くんのだよ？」

「…通天閣よ。」

哀が珍しく会話に入ってきた。

「へー！ いいじゃねえか。毛利のおじさんは？」

近くに小五郎の姿がないので、コナンは辺りを見回し聞いた。すると光彦が答えた。

「二日酔いですよ！ しんどいから一緒に行かないって言ってます。」

「あっそ…。」

聞かなきゃ良かったと、呆れ顔で答える。探偵団の隣では、平次と

和葉が話していた。

「…本間に、一緒に行かへんの？」

「おう。もうすぐで捕まえるところなんや！」

「えー何何ー?! 何話してるのー?」

「ちよつと園子っ!」

園子がからかいに来たが、蘭は二人がいい感じだと思い園子を止めた。

「ほなっ、頑張ってや!」

頬を少し赤らめ話す。

「任せときィ!」

と言うと、平次はバイクに乗りコナンを後ろに乗せて大阪市へ向かった。

午後一時

「なんも起きひんなあ…。」

「まだ日中だしな。」

二人は電化製品店のテレビの前にいた。宝石強盗があれば、すぐにニュースで流れるだろうと思い、待っていた。”プルルル”

平次の携帯が鳴り、電話に出た。

「あ、俺のんやわ。大滝はんからや…はい、もしもし?」

電話の相手は大滝だった。すると数分後、平次の声が響いた。

「な、なんやて?! それ本間か? おう、ありがとさん」

平次が電話を切ると、すかさずコナンが電話の内容を聞いた。

「なんだったんだ?」

「…一ヶ月前、浪速の海賊が強盗を犯した時に、大滝はんの部下が奴らの車を追ってたんやけど、近くの草村で人が倒れてたんやて。」

「……!」

平次は話しを続ける。

「ほんで、人助けるために部下達は奴らを追うのを諦めたんやけど、警察は奴らがひき逃げたんや思とるねん。」

「…そうか。」

コナンは何やら考え込んでいるが、平次は気にせず話しを続けた。

「病院に連れてったけど、倒れてた人は助からんかって…。奴らは拳銃で脅しながら強盗に入るけど、人殺したことなんかないから焦ってたんやろて…」

《…?!》

二人は何かいつものピーンと来るものが来た。

「…服部。」

「…そういうことかもしれへんな。」

二人の口元がゆるんだ瞬間、平次の頭上から叫び声が聞こえた。

“うわあああああー!”

「ん？」

「危ないっ!」

コナンは平次を押し、上から落ちてくるものを避け二人は倒れた。

そして二人は立ち上がり、落ちてきたものを見咄然とした。

「……!？」

「…んなアホな…」

そこには、頭から血を流した橋元が倒れているのだ。

”キヤー”

電化製品店の屋上から落ちた橋元を見、怖がっている人が沢山いる。

「救急車と警察に電話するわ!」

平次はすかさず携帯を取り出し電話をかけた。

**ありえない出来事が…（後書き）**

ああ

連続事件だあ

でも加害者本人が死ぬって、なんかサスペンスっぽくありませんか  
っ?!（ヲイ）

クライマックスがまだまだ先になってしまった…。

だってこの内容は、急に思い付いたんだもんね。

始め考えてたのと違う…（焦）

## もう一つの事件

コナンと平次は、大阪府警へ来た。もちろん、橋元が転落した件で。「平ちゃん、浪花の海賊についての推理聞かせてもーたけど…橋元がて…なあ？」

「治療結果は…どうだったの？」

コナンが大滝に聞いたが、大滝は残念そうに首を横に振った。

「…でも大滝はん、橋元は刑務所に入っとったハズとちゃうんかったんか？なんで店の屋上なんか…」

大滝は一瞬沈黙したが、平次には本当のことを話そうと口を開いた。

「…あんなあ…平ちゃん…」

大滝から話を聞き、平次は声を上げる。

「なんやて?!逃げられたア!？」

なんでも大滝の話だと、橋元は散歩中に、見張りの警備員を眠らせ抜け出したそうだ。

「…刑務所の見張りちゃうから全然知らなかったんやけど…」

大滝は申し訳なさそうに話す。平次は手をパーにし額に当て、あーあ、と思っているようだ。

「でも大滝刑事、刑務所から簡単に外に出られるの？すぐに見つかるんじゃ…」

「そうやねんコナンくん、そこが謎でなあ…」

大滝は頭を抱えているようだ。そこへ、もう一人の刑事が入って来た。

「大滝!」

「ん?どしたんや?」

「橋元の部屋にこんなもんが置いてあったで!」

もう一人の刑事は袋に入った紙を大滝に渡す。大滝は手袋をはめそれを受け取ったが、紙を見た瞬間絶句してしまった。

「……平ちゃん…」



「ん？どないしたんや？」

平次も手袋をはめ紙を受け取った。

「これは…！」

「…遺書か。」

コナンも紙を覗き込み話す。どうやらその紙は、橋元が書いた遺書であつた。こう書かれている。

『この度は、小柳さんにご迷惑をおかけしました。

私が携帯電話なんかで電話をしてず、ちゃんと注意をしていれば…。後悔ばかりです。

お詫びに私は…死を選びます。

ご迷惑をおかけして、本当にすみませんでした。

#### 一 橋元勤』

「そんな訳あらへんやろっ？！橋元は小柳を殺そ思てた…つまり、加藤たちの仲間なんやから！」

平次の声は少々乱れている。

「…平ちゃんの推理は、振り出しに戻ってしもたみたいやな…。一応、筆跡調べといってくれるか。」

大滝はそういうと、もう一人の刑事に遺書を渡した。

「…いや、違う。」

コナンが呟いた。

《…！？》

平次と大滝は、コナンに注目した。

「…橋元の転落は、事件やっちゅーんか？」

「ああ。…橋元は転落するとき、叫びながら落ちてきたんだぜ？自殺しようってやつが、叫ぶ訳ねえーだろうよ？」

「……」

平次と大滝は真剣に聞いている。

「あと…」

「なんや…?」

重い空気に、唾を飲み込む平次と大滝。

「…一週間前、浪花の海賊が逃走してるときに人をひいちまったって言ってただろ? ひかれた人、橋元っつーんだ。」

「なんやて?!」

「そうだよねっ? 大滝刑事?」

コナンは無邪気に子供の口調で言ってみた。大滝も重い空気から逃れたように答える。

「あ、ああ! 確かそやったわ…」

そう言うのと警察手帳をペラペラ捲る。丁度真ん中くらいのページで手が止まった。

「えーと、橋元、ハシモトケンジ橋元健二さん(57)や。」

「その年からいうと多分、勤さんのお父さんだな。」

平次もなるほどそういうことか、と分かってきた顔をしたが、一番の疑問をコナンにぶつける。

「…でもなんで、そんなこと知ってんねん?」

「あん? ああ、さっき博士に電話で調べといってもらよう頼んだんだよ…」

「でも平ちゃん、これからどうする気なんや?」

平次は憎たらしい顔をみせる。

「たまたま事件が入っただけや…。計画通り、浪花の海賊捕まえんで? なんとなく推理がまとまってきたさかいになあ。」

コナンと平次はドアを開け部屋を出ようとする、最後に振り向き大滝に一言言った。

「ほな大滝はん、計画通り頼んまっせ?」

「また情報あったら電話してねっ!」

「分かったわ、平ちゃん、コナンくん! 気イ付けてなあ!」

## もう一つの事件（後書き）

ああ〜

書くのが大変になってきた（^―^；）

でもクライマックス自分でも楽しみにしてるからはよ書こっ♪（笑）

## 浪花の海賊のもとへ！

コナンと平次は、電化製品店の前に来た。けれどそこはさっき来た時と違い、沢山の人が群がっている。テレビ局のカメラも、すでに五台は来ている。

”ここに人が落ちて来たんやで！！俺この目エで確かに見たんや！”

”助からなかったんやろ？かわいいそーに…”

”そんなんゆうてたらアカンよ、向こう行こ！”

「みんなパニックってるみたいやな。」

「ああ、そうだな…」

電化製品店の前のテレビに映っているニュースも、この事件で持ちきりになっている。

”先程午後一時二十分頃、大阪府大阪市〇丁目の電化たかだの屋上から人が転落死したようです。亡くなったのは、橋元勤さん…あ、緊急ニュースが入ってきました。橋元さんは亡くなる前、刑務所に入っていたということです。どうなっているのでしょうか？！どう抜け出せたというのでしょうか？！”

「げ…?!もうんな情報入ってきたのかよ…！」

「マスコミがぎょうさん大阪府警行ったみたいやなあ…大滝はん大丈夫やろか？」

テレビに大阪府警の映像が流れると、コナンの顔に一滴水が落ちてきた。

「…ん？」

コナンが上を向くと、雨が降りだしてきた。

「なんやねん！こんなときに雨降ってんなや…!!?」

「…!!服部!!」

「工藤！」

お互い呼び合うと、二人はすぐさま電化製品店へ入った。そして店の中のテレビを一台占領する。

「どこや…どこや…」

平次はおもむろにテレビのチャンネルを変えていく。―と、平次の手が止まった。

「あ…！これや！」

テレビには、宝石店の映像が映し出された。そこには手を挙げている店の従業員と、拳銃を構えている背の高い痩せ型の男と背の低い男が立っている。目がしらで顔は分からないが、コナンと平次は加藤と神崎だと分かりきっていた。

「ふーん…やっぱ、雨の時を狙ってたんだな。逃げやすいからな。」

「せやなあ、前みたいに刑事に追われて人でもひいたらたまらんもんなあ…」

二人はテレビに見入っている。

「いざとゆー時の為に、大滝はんにテレビすぐ回るよう頼んどって良かったわ…。」

「そうだな。えーと、場所は…」

コナンと平次はテレビの端に書いてある現場の市を見つけた。

《東大阪市！！》

二人は一斉に声を上げると、店を飛び出した。

「あとは俺らのモンやで！」

「尾行して追い詰めるだけだな！」

平次はコナンをバイクの後ろに乗せ、猛スピードで東大阪市へ向かった。

**浪花の海賊のもとへ！（後書き）**

つ…ついに！！

次回で追い詰めます！

コナンと平次の身に何もなければいいのですが…

私は何かを起こしますよ（笑）

その方が楽しいので（爆）

## 追跡開始！　　廃ビルへ

「おい！ 宝石詰め終わったんか？」

「は…はい！ 言われた通り…。」

宝石店の中では、加藤が一人の従業員を拳銃で脅し、カバンに宝石を入れろと命令していた。加藤たちはカバンを受けとり、逃走する体勢になっていた。

「ほな、行くで」

「おう！」

そう言うと加藤と神崎は店を飛び出し、路地に止めてある逃走用の車に乗り逃げて行った。

一方、加藤と神崎がまだ宝石店内でやりとりしていた時。

平次は猛スピードでバイクを走らせ東大阪市へ向かっていた。

「…服部、間に合うのか？」

「従業員を何人か大滝はんに頼まれた婦警やらがやってて時間稼いでくれとるみたいやし、大丈夫と思うねやけど…」

「でもあんま急ぐなよ！ さっきから信号無視ばっか……。怪我したら意味ねえーぜ！」

不安もあるが、コナンはバイクの後ろで呆れている様子。

平次のバイクが宝石店の前の角を曲がると、丁度加藤と神崎が出て来たところだった。平次は店から2kmほど離れた場所で急ブレーキをかけた。

「間に合うたな…。工藤、大滝はんに電話してくれ！」

と言うと、平次はコナンに携帯を渡した。

「分かった！」

コナンは声と同時に、電話をかけ始める。平次は加藤らが車を走らせたのを確認すると、見つからないようバイクで追い掛ける。

廃ビルの前で奴らの車が止まった。五階建てで、全体がさびている。路地も車が一台なんとか止められるような狭さで、辺りも高い廃ビルだらけで、周りは暗い。ひとけも全然ないので、薄気味悪い。バイクは音がバレないよう遠くに止め、コナンと平次は歩いて廃ビル前へとやってきた。

「気味悪いとこやなあ……。」

辺りを見回し、平次が嫌な顔をする。しかしコナンは何も応じず、加藤らが入ったビルを見ている。

「…なるほど、ココが奴らのすみかってわけか。」

「行こか。」

「ああ。」

平次はそこいらに落ちていた鉄パイプを拾い片手に持ち、コナンはキック力増強シューズをカチカチ回す。二人は戦闘準備満タンだ。

「奴らは拳銃持ってるからな、気を付けろよ？」

「そんなん分かってるわ。」

そう言うと二人は、廃ビルの中へ消えていった。



追跡開始！〜廃ビルへ（後書き）

いよいよですねっ！

廃ビルのところは、怖い感じをうまく出せているでしょうか？？

## コナン・平次VS強盗団

「ちよろいモンやなあ。」

「せやな！強盗なんて二人になっても簡単やわ！」

周りにドアも窓もなく、ビルなので天井も筒抜けの突き当たりの部屋の隅にロウソクを置き、加藤と神崎が話している影が見えた。

「今日は乾杯といこか！」

「せやなあ！この盗んだ宝石売って…」

「それはどうかな？」

宝石片手に談笑している加藤と神崎にコナンが話しかけた。その後ろからは平次も出てくる。

「堪忍したらどうや？あんたらの悪事は全てお見通しや…。」

「おっ、お前らはあん時いてた…！」

加藤と神崎は見立ち上がった。二人はなぜバレたと驚きを隠せない様子。

「…江戸川コナン…探偵さ。」

「…同じく！俺は西の高校生探偵、服部平次や！」

言葉を失う加藤と神崎をよそに、コナンと平次は推理を始めた。

「あんたらは…浪花の海賊なんやろ？調べさせてもーたわ！…案外すぐ分かったんやけどなあ。」

「んで一週間前、強盗して逃走中に人をひいちゃった。そんな時車を運転してたのが、小柳さん。最近小柳さんと会った加藤さんは、小柳さんの口からあることを聞いてしまった。」

「『人殺してしもたみたいやし…俺自首するわ。』的なことゆわれたんやろ？」

二人の推理に、加藤はやっと口を開いた。

「…ああ、せや。俺ら強盗たるもん、事故っただけで警察行くてアホらしい。それで強盗やてバレたらどないすんねんて話や。でも小柳のヤツ、強盗のこと絶対バレんようにするからて、ほざきやがっ

た。やから橋元に頼んだんや。あのアホ…殺したれてな!!」

興奮気味に怒りを入れた加藤の言葉に、コナンは加藤を睨み返した。

「バロー! んなもん、強盗してることすらいけねえーことだろ!？」

相手は子供だが、えらい説得力があるなと思い、神崎は聞いていたが、ニヤけながらコナンに質問した。

「…ボウズ? 橋元が死んだ謎は分かっただんかいな?」

「…ああ。橋元さんのお父さんは…、この浪花の海賊の元リーダーなんだろう?」

《…?!》

分かり切った顔をしているコナンに、加藤と神崎は驚きを隠せない。そんな二人に引き続き平次が話した。

「自分の父親がこれで死んだて知った橋元は、なんとかしてここに入ったんやろ?」

「…そうや。丁度人数も足りひんかったし、頭もええし金持ちやから入れたったんや。あん時ひいたヤツの息子ちゅーんも、知らなかったわ。」

「それでここに入った橋元さんは、小柳さんと加藤さんと神崎さんを殺そうとしていた。…父親の仇に。」

『……』

加藤と神崎は真剣に聞いている。そんな加藤に平次が続く。

「それを知らなかったアンタは、唯一強盗の時一緒に行動してへん橋元に小柳を車でひくよう頼んだ。警察に捕まっても、浪花の海賊のことがバレへんからなあ。」

「橋元さんは小柳さんを殺そうとしてたのだから、その話に乗った。」

「んで刑務所で加藤と橋元が面会した。そんな時に橋元が脱け出せたんは……」

平次は加藤をチラチラ見ながら話す。それを感じとった加藤は、自分から話し始めた。

「そうや。あん時二人で外を散歩してたら、橋元が脱け出したいゆ

うてなあ。俺はそんな時丁度睡眠薬持ったさかい、警備員眠らして二人で脱け出したんや。そしたら橋元が着いて来いゆうから、あの電化製品店の屋上行ったんや。そしたら後ろから飛びかかってきて落とそするさかい、とっさに柔道の受け身してしもたんや…。」

「そうしたら…、橋元さんが転落死したってワケか。」

コナンと平次は、自分たちの推理と間違いないと思いつながら聞いていた。

「でも、アレは事故やでえ？橋元まで殺る気なんかあったんや！アイツが悪い！」

「でもコレとアレとはちやうさかいなあ…。」

加藤に続き神崎がそう言うと、神崎はすきを見、コナンの横に立った。

## コナン・平次VS強盗団（後書き）

あわわゝゝ

推理の意味不ですねゝゝ；

ややこしっ！

ゝ分かりますか？

## コナンと平次、絶体絶命?!

「工藤っ!」

平次がコナンを見ると、神崎はコナンのこめかみに銃を当てていた。

「兄ちゃん!あのボウズの命ほしかったら、今見たことは全部忘れてもらおうか…。まあ二人とも死んでもらうんやけどな…ククク…」

加藤も平次に銃を向けながら近寄ってくる。

「工藤!!!!」

「…バール、銃なんか怖かねえーんだよ…。」

”プス”

「はひゅん…」

神崎はその場に倒れ込んだ。

「な…、なんや!？」

そう、コナンは、神崎に肩を持たれていた時に、その腕に向かって麻酔銃を放ったのだった。

「麻酔銃だよ…!」

コナンはそう言うのと、キック力増強シューズのダイヤルを最大に回し、ベルトからサッカーボールを出して加藤めがけてボールを蹴った。

「くらえー!!!」

”バンッ”

《?!!》

「フン…ボウズ、惜しかったなあ。」

”プシュー”

「くそ……!」

加藤はギリギリのところでサッカーボールに銃を撃ったのだった。さすがのコナンが蹴ったボールも、銃で撃たれ穴があいては何ものでもない。

「……!」

「服部イ！」

油断しているうちに加藤は平次に近寄り、銃を平次の目の前に構えた。

「…ボウズ。さあ、この兄ちゃんの顔がぶっ飛ぶのを見たなかったら、神崎の手から銃を取って自分の頭撃ってみイ……。」

ニヤニヤ笑いながら、加藤はコナンを見ている。

「工藤！こんなアホらしいこと聞いてんと！こんな俺が先死んでも工藤が先死んでも、どうせ二人とも殺されんのや……。」

平次の言葉が止まった。”カチャ”

「……」

コナンは神崎の手から銃を取り、無言で自分の頭に銃を当てている。

「…じよ、冗談やめろや…ハハ…なんやねん……工藤アホか！！何言いなりになっとんねん！！」

平次は最初は力なく笑っていたが、今までに見たことのない怖い顔をさせコナンに向かって叫んでいる。

「ククク…おもしろいなあ。」

「なにがやねん！お前タダやおかへん……！？」

「おっと、お喋りはこんくらいで？」

加藤はもう一つ銃を手に取り、コナンに向けた。

「さ、ボウズ、はよう！」

「……」

コナンは無言だ。

「工藤……」

と、コナンは目をつむった。

「工藤…？やめろや！！」

そして平次の声が響きわたる中……、コナンはゆっくりと引き金を引いた―

「工藤――っ！！！！」

**コナンと平次、絶体絶命?! (後書き)**

どうなる〜

コナン〜 (汗)

続き早く書かなきゃ! (爆)



## 1412のお陰

コナンが引き金を引いたのを見ると、加藤はその場で笑ってみせる。  
「ハッハッハ！アホなボウズ。口だけやなあ。ん……！？」

加藤が物音に気付き上を向いた瞬間、トランプが飛んで来た。

”バコッ”

「な、なんやねん?!」

そのトランプは見事加藤の手に当たり、加藤が持っていた銃は全て落ちた。

「今やつ！」

平次は足元に落ちている鉄パイプを拾い、得意の剣道で加藤の頭を叩いた。

「たぁーっ!!!!」

「:!!?」

”バタッ”

平次の剣道さばきは素早く強く、加藤は気絶しその場に倒れた。

「:お前らの負けやで。」

平次は倒れている加藤にそう言うと、思い出したようにコナンに駆け寄った。

「あっ、せや！工藤っ!!……工藤？」

しかし、コナンは平気でその場に立っている。

「あんだよ？」

「お前……引き金引いたんや……」

「バーロ、俺がアイツらの言う通りにするわけねえーだろ？これ見ろよ。」

と言うと、コナンは銃を平次に見せた。

「:安全装置かいな……」

そう。コナンは銃を神崎の手から取る際に、加藤に見つからないよう安全装置をかけたのだった。なので最後までレバーを引いても銃

は放たれないのだ。

「もっと観察力が必要だね…？服部くん！！」

コナンはウィンクし、ニカツと笑ってみせた。平次はそうとは知らずあんなに工藤、工藤と叫んでいたので、今さらだが恥ずかしくなってきたようだ。

「コイツー！！」

”ファンファンファン”

平次はコナンを追い掛けようとする、電話で呼んでおいたパトカーが丁度着いた。

「あっ！コッチコッチ！」

コナンは手を振り刑事達を招いた。

「浪花の海賊、いっちゃ上がりやでっ！」

平次は刑事達にピースしてみせた。それを見た刑事達は、ご苦労さんと言いながら加藤と神崎に手錠をかけた。

「：あんたには負けたわ。ええコンビとちゃうか？」

加藤はパトカーに乗る前に目を覚まし、最後にこう言った。

「ああ。：お陰で、楽しい夏休みになったぜ？」

「そやなあ。」

「フツ：」

加藤は力なく笑い、パトカーに乘せられ連行されて行った。

「はー！今日は疲れたわー！」

帰り道夕暮れの中、コナンと平次は歩いて帰っていた。

パトカーで送って行ってあげようか、と聞かれたが、二人で話したことがあったので、バイクだけ運んでもらうよう頼んだ。

「んっそうだなー！」

二人は同時に背伸びをした。まるで本当の兄弟のようだ。

「最後はえらいヤバイ状態やったけど、アイツに助けてもらえたみたいやな。」

「ああ、敵ながらも、感謝してるぜ。……怪盗キッド！」

そう。最後に加藤の手にむかいトランプ銃を打ち助けてくれたのは、怪盗キッドなのだ。

「せやけど、なんでキッドがいたんや？」

「ああ…。それは多分…」

## 1412のお陰（後書き）

コナン無事だった〜！

え？

面白くない?!（笑）

ここでコナン殺しちゃうと……ねえ?（笑）

小説タイトルと内容が違ってきたので、みんなの夏休みと無理矢理繋げるよう密かに夏休み楽しませてもらったぜとセリフ入れました

（爆）

でも夏休み中に起こった事件だし、犯人もきつとコナンと平次に解かれていい夏休みになったと思うよ！（ヲイ／笑）

次回はキッドキッド！

え？

まだ最終回じゃないよっ！

長くて面倒?!（笑）

## 怪盗キッド!

コナンがキッドについて話そうとした時、向かいから大滝が歩いて来た。

「よう平ちゃん!」

「大滝はん!どこ行ってたんや?もうとっくに他の刑事達が犯人連行してったで?」

「すまんなあ、ちゃう事件が重なってしもて…」

「…ねえ?」

大滝の話の途中で、コナンがその話を止めるよう会話に入ってきた。

「ねえ、大滝刑事…。どうしてここが分かったの?」

「どうしてって……」

コナンは答えようとする大滝の話にまた割り込んできた。

「…大滝刑事には、ここにいて電話してないもんねえ?」

「どういうこっちゃ?」

コナンは大滝を、口元をゆるめ少し笑いながら睨んでいる。横では平次は意味が分からないと首を傾げている。

「なにゆうてんの、コナンくん!平ちゃんたちがここにいて部下たちに聞いてな……」

「とぼけても無駄だぜっ!」

と言うとコナンは、キック力増強シューズのダイヤルを回し、コナンに目線を合わせ中腰になっている大滝向かって空き缶を蹴った。

「…!!」

大滝は素早い身のこなしでさっと避けた。

「これでもとぼける気か?…怪盗キッドさんよお!」

「なんやて?!」

平次はコナンの言葉に驚いた。…いや、驚いたばかりではなく、少し悔しかった。よく知っている刑事は実はキッドの変装した人物とは、全然分からなかったからだ。

そんな平次をよそに、コナンは大滝（Ⅱキッド）に向かい推理を始めた。

「オメーは、浪花の海賊の正体を知ってたんだろ？てゆーか、俺たちより先に調べた。んでオメーが予告状を出そうとした目当ての宝石をあいつらに先に盗られたから、あいつらに接近しようとした。そしたら仲間の一人が殺され、俺たちが捜査してたからやっかいになると思い、大滝刑事に化けたってところろ？」

「……」

大滝（Ⅱキッド）は無言で聞いている。

「それで、加藤と神崎が事情聴取に来たからチャンスだと思い彼らのバッグを探った。…まあ刑事に化けたから、探っても誰も怪しまねえ。」

「そいえば！探った探った探った！」

平次は思い出したように手をポンと鳴らした。

「…実はキッドは、その一週間前に浪花の海賊が盗んだルビーのネックレスを盗む予告状を出してたんだ。」

「なんやて?!」

「……」

コナンは大滝（Ⅱキッド）の方を向いた。そしてウロウロしながら話し始めた。

「でも一週間前のメディアは、浪花の海賊に注目してたんだ。だからキッドの予告状のことはどこにも伝わらなかった。…まあ一部では知ってたみたいだな。キッドのファンサイトに書いてあったからよ…」

「そうやったんかいな。あ、でも何で大滝はんがキッドで分かったんや？」

「バーロ、大阪弁が微妙に変だろ？イントネーションも違うし…」

それに、俺が浪花の海賊の推理をした時、大滝刑事は何も疑問を持たなかったろ？『小学生のくせに』って普通そう思うだろーがよ。」

「ああ、さすが見事だな。…探偵君っ！」

”バサッ”

さつきから無口だったキッドが、やっと口を開いた。そして同時に変装を溶くと、いつものタキシード姿になった。

「…まあ、大阪弁は難しかったぜ？日本語も奥が深いんだな。」

「ああ。俺も大阪弁だけは苦手だぜ。」

二人はにくたらしい顔で睨み合っている。

「まあ今回は見逃してやるよ。オメーに助けてもらったからな。」

「そうやなー。マジで工藤が危ないところやったし。」

「フッ…ただ通りかかったただけだぜ！」

と言うと、キッドはハンググライダーを広げ飛びたった。

**怪盗キッド！（後書き）**

ああ～

説明意味分かんねえ～（汗）

残念ながら、まだ最終回じゃないです（笑）  
長すぎる?？



## 楽しかった夏休み

「ただいまあゝ！」

コナンと平次が服部家へ帰ってきたのは、午後七時を回った頃だった。

二人は茶の間へ入ると、他のみんなは既に服部家での二度目の夕食を食べ始めていた。

そして静華が真っ先に駆け寄って来た。

「平次、遅いわー！携帯にナンボかけても出えへんし、心配しててんで！：こんな小一の子オ朝から連れ回してたらアカンやないのっ！」

静華は途中コナンを向き、心配そうな顔をした。平次の方を向くと、すぐに怒った顔になったが。

「ええやないか！帰ってきたんやし！」

「まあまあ静華さん：楽しく食べましようよ！」

小五郎がなだめると、二人も席に着いた。

平次が席に着くと、隣に座っている和葉が鍋をつつきながら話し掛けてきた。

「なあなあ平次！浪花の海賊、捕まったんやてなっ！なんでも高校生と小学生が活躍したみたいやけど……」

「分からんかった？」

「へ？」

和葉が言い終わる前に、平次が自分を親指で指したが、和葉はなんのことも分からないう様子。

「せやからアゝ！！俺とこのボウズで解決してきたんやっ！」

《うっ、嘘ー?!》

話を聞いていた蘭や園子も、思わず声を上げてしまった。

「スゴイやろ？スゴイやろ？」

自慢しながら話している平次に呆れながら、コナンも席に着いた。

座ると、隣にいる哀が話し掛けてきた。

「……生きているみたいね。」

「あん？人を勝手に殺すなよなっ！」

刺身を食べかけたコナンは、哀に向かい半笑いで答えた。それを聞いた哀も笑ってみせた。

「……良かったわ。私の勘違いで。」

「……。あん時言ってたことだろ？」

「ええ……。」

箸を置き、少し真剣に話し始めた。

「半分は当たってたぜ？」

「え……？」

「……まあ、心配すんなよなっ！今は無事なんだしょ？」

「……どっちなのよ。」

コナンの表情が変わり、哀も安心した。

「キヤー！あたしもキッド様に会いたかったー！！！」

重い空気が流れたが、コナンと哀の会話をよそに隣では園子たちがハシャイでいる。

そんな光景を見、なんだかんだ言っても、これが一番平和だとコナンは一人思っていた。

「（ったく。……フツ）」

終

……え？！

まだ終わらないの？！

(笑)

## 楽しかった夏休み（後書き）

最後が変になりましたあ（泣）

しかも、今までで一番つまらん内容かもかも…（汗）  
どうでしたか？

これからは第一話から修正をしていきます。

あってはならない間違いだらけ〜（滝汗）

ちゃんと直そうと思ってるので、間違い見つけても指摘はお止めく  
ださい（汗）

修正する気がなくなります（ヲイ）

……まだ続きますよ…?!（笑）

お楽しみに☆

## オマケ1 コナン×平次（前書き）

くだらなくい雑談です。

登場人物はコナンとわたくし（作者）と平次でございます。

## オマケ1 コナン×平次

コナン

「はー！ やっと終わったな、この小説。でも、途中引っ張りすぎじゃねえか？」

作者

「なんや？ 文句でもおありで？ アンタをあのまま殺しといた方が良かったかもしれへんなー?? (笑)」

(作者は関西人です。関西弁で失礼。)

コナン

「(この作者め……。)」

平次

「その良かったかもなア？ (ニヤニヤ)」

作者

「さすが平次君！ 関西人同士気が合うなあ♪」

平次

「ほらおーきに♪」

コナン

「えっへん！ そこで盛り上がらねえでくれるか？」

作者

「…この子、本間うるさいなあ。いつも大変やろ？」

平次

「大変や大変！生意気でプライドだけは高い奴でなあ…」

コナン

「だーっ！んだよ何だよ！イジメかよ？！それに小説終わったのに、このオマケって何なんだよ？！」

作者

「…あたしの趣味やけど？（笑）やりたいからやってんのっ！」

コナン

「へー…。大好きなコナンをイジメたいのか…。そうか、そうか。青山先生にチクってやろ…。」

作者

「やつ、やめてよーっ！！（汗）それだけは！！！」

平次

「卑怯やで！！イジメよりひどいやんか！！」

コナン

「ったく……。…で？何話せばいいんだよ？」

作者

「うー…ん。分からん！」

コナン

「読者のみんなに、ここまで読んでくれてありがとうだろっ？！」

作者

「あっ！せやった！あたしが初めて書いた小説で下手下手なのに…  
…。最後まで読んでくれておおきに！！！！（号泣）」

コナン

「（この作者…大丈夫か?!）」

平次

「ホレ、工藤もおじぎしいや!!」

コナン

「（ったく…。）」

読者の皆様、ここまで読んでくれてどうもありがとう♪また、どこかでお会いね!!」

作者

「今さら子供口調でも可愛くないやん…。」

平次

「せやなー。それにまたどこかでってゆーても、まだこれの他に連載しとる小説あるやんけ？夏の暑さで頭おかしなってんのとちゃうかー?」

コナン

「だーっ!!うっせえーんだよっ!!俺はもう帰るぞ?!」

作者

「誰も止めませんよー!さようならー!」

平次



「本間にイ、気の短いやつचनाあ。」

コナン

「(コイツら……! 怒)」

作者

「コナン君のオマケは微妙でしたが、まだまだ他のキャラでのオマケは続くので楽しみにしていってください☆」

平次

「せやでえ! 俺もまた出るからよって、楽しみにしといてや!」

作者

「では……」

コナン

「またねー☆☆」

作者

「あ”?! 締めめの台詞取られた!!!」

コナン

「では、ボクの歌で締めます! 聞いてください。『ぼくがいる』  
♪明日あゝになゝれゝばあゝ涙あゝが乾あゝくゝ心ゝもお  
ゝ色ゝづゝいてくるゝゝゝ♪」

作者

「…音痴でどうもすみません…… (あたしの小説読んでくれる方

「確実に減るなあ……」

## オマケ1 コナン×平次（後書き）

コナン軽くいじめた？（笑）

オマケってこんなんでもいいのかなあ……

面白くしたいんだけど。

あ、オマケは評価に入れないでいただきたい！！（笑）

## オマケ2 蘭×園子×和葉（前書き）

私たちの恋愛トーク？

やっぱり園子はおませです。

## オマケ2 蘭×園子×和葉

蘭

「こんにちは！毛利蘭です。」

和葉

「こんにちはー♪」

園子

「本編では出番が少なかったからねっ！ここで喋っとかないと！！」

蘭

「園子ったらー！」

和葉

「園子ちゃんらしくてええやん！」

園子

「えへへー♪」

蘭

「和葉ちゃんは結構台詞あったよね？」

和葉

「えっ？そんなことあらへんよ！」

園子

「そうそう…。この小説ってさあ、50%は和葉ちゃんと服部くん

のラ・ブで出来てたものねー♪」

蘭

「アハハ…（苦笑）」

和葉

「ち、ちやうよー！絶対そんなことあらへんからっ！！」

園子

「あれー？照れちゃってばっ！可愛いんだから、もう！」

和葉

「やめてーなってば！！／＼／＼ら、蘭ちゃんはそんなん思っへんよね？！」

蘭

「え？えっと…」

園子

「正直に言うのよ！蘭！」

和葉

／＼／

蘭

「和葉ちゃんと服部くん、素敵だったよ？」

園子

「よねえー♪」

和葉

「ら、蘭ちゃんまで冗談やめてっ!!」

蘭

「冗談なんかじゃないわよ!」

園子

「そうそう!」

和葉

「やっ……／＼／＼」

蘭

「園子はちょっとからかいすぎよ!」

和葉

「ほ、ほらア!」

園子

「はぁい…。(面白いのに、ねえ。)」

蘭

「さてさて、私達からも読者様に挨拶しましょ!」

和葉

「そっやね!」

園子

「えーっと、ここまで読んで下さり、」

《ありがとうございます!》

蘭

「園子って、言い出しうまいのね?」

和葉

「そうやねー!」

園子

「うん、まあ財閥のパーティなんかでよく見てるからね。」

蘭

「そうよね。園子って、数えきれない程パーティ出てるのよね。」

和葉

「なあ園子ちゃん? 今度アタシも連れてって?」

園子

「もちろんオッケー!」

和葉

「蘭ちゃんも行こー♪」

蘭

「また、声掛けてね園子。」

園子

「ええ♪」



蘭

「それじゃあみなさん！」

和葉

「これからよろしゅうねー♪」

園子

「ねえ作者さん？次書くのはラブラブのにしてねえ♪もちろん、蘭&工藤君と、和葉ちゃん&服部君ね♪」

蘭

「園子っ！／＼」

和葉

「園子ちゃん！／＼」

園子

「もちろん、あたしと真さんのストーリーも忘れずにい☆」

**オマケ2 蘭×園子×和葉（後書き）**

こんなものでいいのでしょうか……

台詞はちゃんと均等にしましたつもりです！

### オマケ3 少年探偵団（前書き）

くだらない、雑談です。

少年探偵団登場♪

作者はこっそり覗いてるという設定でお願いします。

### オマケ3 少年探偵団

元太

「ここからは少年探偵団の出番だぜっ！」

光彦

「そうですね！本編では最終回に連れて、出演がだんだん減ってきてましたから…」

歩美

「そうなんだよねえ。コナン君がまた抜け駆けしてたから！！哀ちゃんもズルいと思わない？」

哀

「…そうね。自分だけクライマックスに映ってたものね。」

コナン

「（へいへい……）」

元太

「だろ?!この作者はどんな考えしてんだっ?!」

光彦

「ここだけの話、始めは少年探偵団が主役だったのに登場人物が増えるにつれ、コナン君と平次さんが主役に変わったんですよ!!」

歩美

「どうなってるのかなあ…。」

哀

「…私達じゃやりにくいんじゃない？」

作者

「（うるさいなー！アンタたちの主役でもあるでしょうが！『DETECTIVE BOYS』って小説名からして贅沢なのがっ！）」

コナン

「（ハハハ…）」

元太

「もっと俺たちを出させろよ！」

光彦

「今回は必ずですよ！」

歩美

「じゃないと、一生出演拒否するもんっ！」

作者

「（分かってるっちゅーの！やから子供は嫌いやーー！！）」

元太

「どんなストーリーがいいかなあー！」

光彦

「やっぱ推理モノですよねっ♪僕達がサラサラっつと謎を解くんですよ！」

歩美

「：でもここの作者さん、トリック考えられないって言ってたから、無理かなあ…？」

哀

「そうね。単純なものになりそうだわ…。」

作者

「（アホですいませんでしたねえっ！！！！）」

コナン

「そうだな！推理モノ頼むぜ？作者さんよお！（ニヤニヤ）」

作者

「（あの顔は…：オマケ1でイジメたからって仕返しやな 怒）」

元太

「じゃあよろしくなっ！」

光彦

「とびっきりのですよ！！！」

歩美

「楽しみだねっ！」

哀

「そうね。」

作者

「（そこまでゆうんやったら、短編で作ったるわ！！！！コナン見て

ろよ～～！妖笑」

コナン

「（…寒気が…）」

元太

「ん？どうしたんだ、コナン？」

光彦

「寒いんですか？」

歩美

「大丈夫ー??」

コナン

「へ、平気だよ…！」

哀

「…この作者のことだから、貴方を危ない目に合わせ小説を作る気かね。」

作者

「（哀タン大正解♪笑）」

コナン

「ったく…。しょうがねえヤツだな。俺ばかり…。」

哀

「……組織ものも、見てみたいわね…。」

作者

「（マジ?!…あたし組織の雰囲気かんないよ!?でも哀タンが言うんなら言うんなら……。）」

コナン

「…危ねえけど、スリルはありそうだな。」

哀

「…でしょ?もし作るんなら、江戸川君を危ない目に合わせてあげて。」

コナン

「おいっ!」



### オマケ3 少年探偵団（後書き）

くだら〜ん；

くだらなすぎるよう（泣）

こんなんでごめんなさいっ！！

探偵団はなんか書きにくい……

あ、ここで話してた少年探偵団の短編小説、もしかしたら書くかも  
…！

組織のは気が向いたら……ね…。

#### オマケ4 平次×和葉（前書き）

関西弁で喧嘩してます…。

作者の中での二人はこんな感じなのです（笑）

## オマケ4 平次×和葉

平次

「二回目の登場やで！」

和葉

「アタシやて二回目やおん♪」

平次

「お前は出て来んでもええ！」

和葉

「なんなんよ?! それやったらアンタも出て来んでもええやろ?! ?  
」

平次

「俺はなあ、前回のオマケはくどいよーて、ボウズに取られてあんま喋られへんかったんや!!」

和葉

「コナン君は子供やからしゃーないやん! 大人げないなあ!」

平次

「ボウズは子供やないんや! 和葉は分かんと思うけどやな!」

和葉

「ハア? アンタ、何ゆうてんの?! コナン君はどっからどー見ても子供やんか! 暑さで頭おかしかったんとちゃうか!」

平次

「うるさいねん！お前が知らんだけやっ！」

作者

「あのおゝ、あまり喧嘩しないでよ？」

和葉

「作者は黙っというてよ！」

平次

「そうや！それにこんな言わせてんの作者やろが？！」

作者

「まっ！作者に向かって何ゆうん！この子達は？！ほんなら…こうしたるわ！ククク…（不気味な笑み）」

平次

「（なんや？言葉が勝手に…）和葉、俺実は和葉のこと…」

和葉

「（なんやの？勝手に口が…）アタシもや…平次！」

平次

「（こんな言いたない！！）めっちゃ好…」

和葉

「（あゝやめてよゝゝ！！）あたしも好…」

作者

「ククク：あゝおもろいなあー！」

平次・和葉《何ゆわせんねん！！！！！！》

和葉

「平次ィ？今のはゆわされてたことやし、アタシの本音やないで？」

平次

「ハア？和葉にそんなんゆわれたら気色悪いわ！俺もゆうたことな  
んか0. 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 ミリも思っへんわ！」

和葉

「なによっ！アタシだって0. 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1  
もや！」

平次

「それやったら俺は…」

作者

「こんな二人で、ごめんねえ。こんなんじゃ、いつまで経っても平  
次と和葉のラブコメなんか書けへんなー。」

平次・和葉《書かんでええ！！！！！！》

#### オマケ4 平次×和葉（後書き）

こんなんでもいいですかね？

ま、私の願いは笑ってくれればそれでいいので（爆）

**オマケ5 小五郎×目暮×白鳥（前書き）**

大人の男達のくだらない雑談。  
…あんま面白くないかも（汗）

## オマケ5 小五郎×目暮×白鳥

目暮

「いや〜どうも！今回は一コマしか出てなかったが、ここで出させてもらおうよ！」

白鳥

「…警部は喋れただけでもいいですよ。私なんて……！」

目暮

「おいおい！そんなに落ち込まずに落ち込んでくれっ！（焦）きっと次は出るから、のう？」

白鳥

「別にっ、落ち込んでなんかいませんよ…。」

目暮

「（どうしたものかね汗）」

白鳥

「しかも…高木君と美和子さんが二人でデ……」

目暮

「何?! 高木君と佐藤君も出ていたのかね?!」

白鳥

「…そうなんですよ（涙）」

目暮



「見逃してしまったのう…。」

小五郎

「警部殿ー！」

目暮

「お！毛利君！よく来たな！」

白鳥

「…今回も事件に遭遇したんじゃないやありませんか？」

小五郎

「今回は、大阪の色黒ボウズとコナンが遭遇したんだよ！毎度毎度俺のせいにするな…」

目暮

「そうだったのか…！毛利君達は大阪へ行ったんだったね？」

小五郎

「そうっすよ！何か？」

白鳥

「警視庁で、見てたんですよ。…強盗団の事件の番組をね。」

目暮

「小高生が解決したって、まさか服部君とコナン君とは驚きだよ！」

小五郎

「…偶然まぐれで強盗の時に遭遇して、捕まえただけっすよ！あいつらがそんなの…」

白鳥

「やはり。コナン君は小学生にしては凄すぎる…。」

目暮

「18歳になったら、是非警視庁に入ってもらいたいものだな!」

小五郎

「日頃からこの毛利小五郎が世話をしてるからっすよ! ナーハツハツハツ!」

目暮

「…君もコナン君ぐらいの頭を持ったらいいんだがね。」

白鳥

「眠っている時以外にも、発揮してください。」

小五郎

「ナーハツハツハツ!」

目暮

「…(呆)行くぞ、白鳥君。」

白鳥

「ハツ!」

小五郎

「警部殿ー? 待ってください!」

目暮

「君は来なくていいから！」

小五郎

「警部殿ー！」

**オマケ5 小五郎×目暮×白鳥（後書き）**

高木と佐藤も出てたんですよ！！  
またオマケで書きます☆

## オマケ6 大阪の人達（前書き）

大阪のキャラです!!

なんか、微妙ですけど（汗）

雑談オマケはこれで終わると思われます☆

## オマケ6 大阪の人達

静華

「平次がお世話になり、すみませんねえ。」

作者

「いえいえ、とんでもないです！静華さんの息子さんなら大歓迎ですよ〜！」

静華

「おおきに！」

大滝

「えっと、出てもええんかな？（汗）なんかキッドに変装されてたんやけど（苦笑）」

作者

「全然いいです！てか、本物の大滝を出せずにすいませんでした！」

大滝

「全然ええって！気にしてへんから……（悲）」

作者

「（あああっ！ヤバイ（汗））えーっと、オマケで本物の大滝警部はどうだったか！というのを書きますから…」

大滝

「ホンマですか?! いや、有難いですねえ!」

作者

「アハハハ…」

平蔵

「…大滝はキッドやったっちゅーもう一つの証拠もあるで?」

静華

「?？」

大滝

「なんですかのん?」

平蔵

「…大滝のこと”刑事”ゆうてたやろ。なんか違和感あるな思てて。」

静華

「本間やわぁ! 大滝はんは”警部”やんなあ?」

大滝

「そ、そうですよ。」

平蔵

「…多分大滝刑事ゆうてたんは、ニセモノやゆう読者プレゼントみたいなモンとちゃうか?」

作者

「さ、さすが! おやっさんです!! 読者さん分かるかな思て!」

静華

「なるほど！」

大滝

「そこで気付いた人は名探偵やな!!」

平蔵

「…さすがの平次も分かってへんみたいやったな。喝入れてきたるか…。」

作者

「分かった人は、こっそり教えてくださいねっ（笑）」

静華

「そうやわ、お礼しんならん！」

大滝

「そうやな！」

静華

「今まで読んでくれてはって、おおきにね！」

大滝

「おおきに！」

静華

「ホレ、アンタも！」

平蔵



「…おおきに。」

作者

「これからよろしくお願いします!!」

遠山

「遅れてしもて堪忍!」

平蔵

「遠山…。もう、終わったで。」

遠山

「え?!」

## オマケ6 大阪の人達（後書き）

この人達の口調あんま分からないっす；  
変ですよ～～～（泣）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8084a/>

---

みんなの夏休み

2010年10月9日15時36分発行